赤兎

「千」

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤兎

【Ｎコード】
Ｎ４２３４Ｆ

【作者名】
「千」

【あらすじ】
桜木兎（さくらぎうさぎ）。高校にも受からなかった俺の名前。喧嘩ばかりしていた。そこに現れたのは、訳のわからん女二人。俺はその二人から超現実の存在を知り、ある力に目覚めることになった。・・・・・・そして、俺の運命は廻り始めた。

プロローグ（前書き）

一応不良小説ではありません。
ここからは方向が１８０度変わります。

いろんなマンガを参考にしているので、
「あ、これどっかでみたなぁ？」っていうことも
あると思います。スイマセン・・・。

プロローグ

プロローグ

桜木兎（さくらぎうさぎ）

小学校、中学校でのあだ名は「ウサ」。

こんな名前だけど、俺は男だ。

この名前は結構気に入ってるんだ。

学校ではだいたいのことは完璧にこなしてきた。

学校自体は嫌いだが、成績さえ良けりゃ文句もないだろ？

テストはいつも３５０人中２０位くらいだな。

今までで思い通りにならなかったことなんてなかった。

・・・高校受験以外は・・・・。

地域の最難関と呼ばれる高校を受けたんだ。

調子のってな。

二次希望の高校も受からなくてな。

浪人だよ。

そっから俺は何もかもがめんどくさくなった。

もう勉強も、大人の顔色うかがうのも。

いろんな経験をしたさ。

髪染めて、こえー格好して

タバコだってやったし、酒も呆れるくらい飲んだ。

喧嘩に明け暮れる毎日が続いた。

体はかなりデカイほうだったし、体格もよかったから

相手が高校生だって負けることなんてなかった。

そのうち、俺に従う奴等が増えてきて

俺はその連中の頭（ヘッド）になってた。

俺のことは名前がこんなだから、そういう人たちの間に

あっという間に知れ渡ってた。

だからすぐに通り名がついた。

血に赤く染まった兎って意味で

赤兎(あかうさぎ)。

プロローグ（後書き）

これ・・・・暗ッ！！！
こっから明るくします！
そーゆー予定であります！

第2話　出会い（前書き）

高校受験に失敗した桜木兎。その噂は世間に浸透しつつあった・・・。

第2話　出会い

ドンッ！

「気をつけろよ？」

「あ・・・す、すいま・・・」

タタタタタタタ・・・・

最近では、俺のことが一般世間にも

知られて来ているらしい。

俺はやりたいことを全部やってきたが、

盗難事件なんかは起こしてない。

喧嘩は数え切れないほどしたがな。

そんな時だったな、アイツが俺の前に現れたのは・・・

ドンッ！

チッ、またかよ。

「気をつけろよ？」

「気をつけるのはそっちだろ！

前向いて歩けよ！！」

ああ！？いきなり何様のつもりだ！？

と思ったら

セミロングの漆黒の綺麗な髪に

大きな茶色い瞳。

男言葉こそ使っているが、

女？？？

「あんまり調子に乗ってると戦(や)るぞ？？」

戦(や)るだって？この俺とか？？

「ちょっと！こんなとこで能力(ちから)使うのやめてよ！」

黒髪の女と一緒にいた女がしゃべった。

この女は栗色の長髪をポニーテールにしている。

目は少し細めで、真っ黒だ。

ってそんなことより、能力(ちから)？

なんだそりゃ？マンガの読みすぎか？

「そんな気はさらさらないよ。
無駄に能力乱用するほど馬鹿じゃないよ。」
「お前らふざけてんのか？なんだ、その能力（ちから）って？」
「ほら、変に興味持っちゃったじゃない！」
「・・・あたしはなんにも言ってないよ。」
「う・・・うるさい！！」
俺のことは無視か？
2人だけでギャーギャー言い合ってやがる。
見ててスッゲェイライラしてくる。
「おい！てめーら一体なんなんだ！？
いきなりふざけんじゃねぇぞ！！」
「！！」
「！！」
あ？
2人が同時に目を丸くしやがった。

「・・・わかった？」

「・・・うん。すごいよ・・・この人・・・。」

「・・・連れてったほうがいいんじゃない？」

「・・・そうかもね。」

？？？？

何がなんだかわかんねー。

「とりあえずついて来て！」

俺は腕をつかまれて、どこかに連れて行かれていた。

第2話　出会い（後書き）

雰囲気変わったかな？
これからも変えていきます！
ドンドン盛り上げていきます！！

第3話　宣告（前書き）

道端で会った女2人に連れてこられたのは・・・・・駅？しかし、
その地下には信じられない光景が広がっていた！！

第3話　宣告

・・・・・。

駅？

俺は、もう使われていない駅の前に

連れて来られていた。

「ここよ、ここ。」

ポニーテールが言った。

「・・・・・。」

「どうしたの？」

「いや・・・胡散臭いにもほどがあるだろ・・・・。」

マジに胡散くせえ・・・。

ホントになんなんだ、こいつら？

「最初はね、あたしもそう思ったさ。

とりあえず中に入んなよ♪」

黒髪はなぜか嬉しそうだ・・・。

言われるままに中に入っていく。
階段を下りきると・・・・・。

「う・・・おお・・・・・。」
「あ、やっぱ見える？」
凄い光景だった！
秘密基地？みたいな感じだ。
デカイモニターが中央にあって、
その周りをコンピュータが囲んでる。
「これね、能力(ちから)のレベルが
高い人しか見えないようになってるらしいのよ。」
ポニーテールが説明する。
ていうことは俺もその能力(ちから)が
あるってことか！？
そもそも能力(ちから)って一体なんなんだ！？

「さ、行くわよ。」

ポニーテールは先に進んでいく。

「行こっ♪」

黒髪は上機嫌だ。

さらに進むとドアがあった。

「今度はなんだ？まずここはなんなんだ？」

「ま、説明は全部この人にまかせるわ。」

ちっ。

ウィン！

「咲原華（さくはらはな）、入ります。」

「天宮星南（あまみやほしな）、入ります。」

黒髪、ポニーテールの順に入っていく。

「桜木兎、入るぞ。」

一応名乗って入る。

「おや、華さんに星南さん。

民間人を連れてくるなんて珍しいですね。」

広い部屋に大きな机が一つ。

そこには濁った金髪の長髪に、メガネの男が一人。

随分変わった洋服を着ている。

社長室か、ここは。

「おい、あんた。ここの1番のお偉いさんと見るが・・・うぷっ！」

前に一歩でて、質問攻めにしてやろうと思ったら

後ろから黒髪に口を押さえられた。

「バ・・・馬鹿！なんて口の利き方するの！！

この世界では“帝王（エンペラー）”と呼ばれるお人なのよ！！」

「エ・・・帝王（エンペラー）？？」

「まあまあ、華さん。いいですよ。

まだ何も話していないんでしょう？」

長髪が落ち着いた声で黒髪をなだめる。

・・・なんかむかつくしゃべり方するな、コイツ。

「放せよ！」

俺は無理矢理黒髪を振り払った。

「まず、お前らは何者だ？

コイツらの言う能力(ちから)って一体何なんだよ？」

・・・・・・・・・・。

「はあ・・・。華さん、星南さん。

民間人に能力(ちから)のことしゃべったんですか？」

「あ・・・・！いや！そーゆーことではなくてですね・・・・！」

「この人はかなりの潜在能力を秘めています。

それを見込んで連れてきたんです。」

慌てふためく黒髪に対して、

ポニーテールは落ち着いている。

「・・・まあ、お二人の感覚(センス)は

相当なものですからね。信頼できると思いますが・・・・。」

ダン！！！！！

「おい！！！いい加減にしろよ！！

俺の質問に答えろ！！！！」

壁を叩きながら、俺が叫んだ。

その瞬間、突然妙な感覚が俺の体中を走った。

い・・・今のはなんだ！？！？

「！！！」

長髪の男が驚いた様子でこちらを見た。

「なるほど・・・・・・・・・・。

わかりました、説明しましょう。

簡潔に言います。あなたは・・・・・・

人間ではありません。」

第3話　宣告（後書き）

この世界の説明がまだ全然できてません（T－T）

・・・・頑張ります・・・・。

第４話　正体

「は・・・・？

人間じゃない？俺が？」

「その通りです。」

長髪がニコッと笑って言った。

・・・いちいちムカつく言い方するな・・・。

「あなたは人間なんかじゃありませんよぉ。

あなたの体には純粋な人間の血は流れていません。」

「つまり俺は人間となんかのハーフってことか？

俺は悪魔を親に持った覚えはねーぞ。」

そりゃそーだろ？

自分の親から『いやー、実は悪魔なんだ♪』なんて

言われたヤツなんていないだろ？

「違いますよぉ♪

あなたは天使の血を受け継いでいるはずですよ。」

「なにぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃいぃい！？！？！？！？」

天使だと！？そういったよな、この野郎！？

天空の天に、使者の使と書く、あの天使か！？

俺が？この俺がか！？

「アッハッハッハッハッハッハッハ。

驚いてますねぇ♪」

「うるせぇ！

お前！この俺が天使だと！？

そうぬかしたな！？」

「・・・総統。まず自己紹介から始めませんか？

私たちもまだだし・・・・

この時点でもう理解できてないですよ？」

「あれ？あなた達もまだだったんですか？」

………………………………………

…………

この時点でまだ誰にも自己紹介されていないし、

していないのにも問題があると思うが、

とりあえず一人ひとり自己紹介。

まずは黒髪。

「あたしは咲原華（さくはらはな）。桜大付属高校の一年だよん。華でいいよ。よろしくねぇ♪」

ウインクして、ひらひらと手を振る。

次はポニーテール。

「私は天宮星南（あまみやほしな）。華とは幼馴染で同じ高校よ。好きなように呼んで。あ、でもさん付けだけはよして！」

さん付けは嫌いなタイプか。

最後に長髪。

「私はクルエル＝クレバラスと申します。
ここの総統、つまり最高責任者ですね。
以後お見知りおきを。」
そう言って頭を下げた。
コイツ日本人じゃねぇのか。よく見りゃ目が青いな・・・。
・・・・俺も自己紹介するか。
「俺は桜木兎（さくらぎうさぎ）だ。
お前らの世話になるつもりなんてねぇが、まあよろしく。
で、俺が天使だからなんなんだ？
天使ってなんだよ？」
もっともな質問だろ？この状況でできる質問はそれしかないハズだ。
「まず、最初に言っておきますが、
ここにいる私たちも全員天使です。
さて、説明は・・・・
お二人に任せることにしましょう♪」

軽くスルーかよ・・・・。

「え！？私たちですか！？」

「こういうのは一番偉い人がやるもんじゃないですかぁ！？」

「私は嫌ですよぉ。メンドクサイですもん♪」

・・・・。

またギャーギャーやり始めた。

・・・・これから俺は一体どうなるんだよ・・・・。

何かが変わる予感がする。

第４話　正体（後書き）

さーて、相変わらずストーリー展開がおっそい！！

マジでスイマセン・・・・。

第5話　正体2

「ここまでは理解した？」

「えー・・・つまりこういうことだな？」

あれから1時間。俺はまだ説明を受けていた。

“天使”とは一体何なのか。

単刀直入に言っちまうと“天使の血を受け継ぐ者”のこと。

そのため人智を超えた能力、つまり超能力が使える。

その能力のことを我々は『超術（ちょうじゅつ）』と呼ぶ。

・・・・・らしい。

「そうそう！！わかってるじゃない。」

「で、それがなんなんだ？」

いちいちリアクションがでかいぞ、華。

「だから！これは何にでも応用できる力なの！！

犯罪に使われることだってあるし、

それに超術なんて使われちゃ、銃なんて意味がないの。

そういう時のためにこの組織があるの。」

世界中の天使が集まって結成した組織、『天界(ヘヴン)』。

それは超術に関するトラブルを解決する、いわば超警察。

世界中に天界は存在し、全ての超術の情報を管理している。

「なるほど。で、俺もこの天界とやらに入れ、と。」

「そういうこと。やっぱ全部わかってんじゃない。」

はあ・・・・・。

俺はついさっきまで高校にも受からなかった、ただの不良だったはずだ。

それが警察?犯罪を取り締まる側にまわれとは・・・・。

「・・・・・俺は高校にも受かってn・・・・」

「いいんですよ。この仕事は能力を持っていなければ

話にもならないんです。

あなたの身分がどうであれ、そんなことは一切関係ないんです。」

今までめんどくさがって会話に参加しようとしなかったクルエルが

いきなり入ってきた。

「んなこと言われてもな・・・・。

具体的にどうしろって言うんだよ？」

「まずはあなたの能力を測定しなければなりません。

測定というのは、能力の強さだけではなく、

種類も判断します。」

種類？んなこと聞いてないぞ。

一瞬ポカンとした顔をしたら、星南がすかさず言った。

「超術は個人個人で違ってくるけど、基本的に３つの種類に分類されるの。

１つ目は超能力系（サイコキネシス）。これが一番ポピュラーなタイプね。

２つ目は強化系（カスタム）。これは自分を含めたあらゆる物質を強化して使用するタイプよ。

最後に変身系（トランス）。これは最も強力で、最も希少なタイプ。

遺伝子レベルで変身できるものは決まっていて、

２段階の変身が可能と言われているわ。」

おお・・・・。

こんな詳しい説明をありがとうよ。

さて。ここまできたら、気になることはあと1つ。

「その測定とやらは何をするんだ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

なんだ、今の沈黙は！？！？！？！？！？！

クルエルが今までで一番嫌〜な、嬉しそうな顔で笑った。

「ん？簡単ですよー？

あなたに死んでもらうんです。」

第6話　悪夢

「はあ・・・・・。」

今俺は、ある建物の一室にいる。

クルエル曰く、「天界の組織関係のホテルです。」だそうだ。

これまでのいきさつを説明しよう。

「まあ、今日はいろいろなことが一度にあって

疲れてるでしょうから、あなたに死んでもらうのは明日にしましょう。

また来てもらうのは面倒なのですが、泊まってってもらえますか？」

クルエルはニコニコして言う。

「ちょっと総統！親御さんには連絡しなくちゃね。」

星南はもっともなことを言う。

この中で一番まともな性格してるのはやっぱ星南だな。

でもな・・・・。

「いいよ、星南。わかった。泊まってくぜ。」

「連絡はいいの？」

「ああ。俺、親いないし。」

「え？」

「え？」

華と星南があからさまに驚いた顔をする。

クルエルの顔色に変化はないが。

「母さんは俺を産んですぐに死んでる。

親父は俺が生まれたとき蒸発しちまってな、どこにいるのかもわかんねぇ。

ま、いわゆる行方不明だな。」

「・・・・ごめんなさい・・・・。」

ホントに星南はいいヤツだな。

俺にそんな風に謝ったヤツいねぇよ。

「き・・・気にすんなよ。」

慣れない言葉に戸惑って顔が赤くなる。

「あれ？もしかして星南のこと意識してる？？」

・・・・華は嫌なヤツだな。

お前も星南を見習えや。

「じゃあ、移動しましょう。こちらにどうぞ。」

そんなわけだ。

俺は明日、少なくとも一度は死ぬことになるだろう。

オレハアシタシヌ

どういうことなんだ？

聞きそびれちまったし、想像もできん。

生き返れるのか？

オレハアシタシヌオレハアシタシヌオレハアシタシヌ・・・・・・・・・・・・

そんなことを考えていたら、いつの間にか眠っていた。

その夜、俺は久しぶりに夢を見た。

親父の夢だった。正確には親父らしき影が出てくる夢。

俺は親父の顔も知らないからな。だが、あれは絶対親父だと直感した。

夢の中で、影は俺に謝ってきた。

「悪かったな・・・今まで。」

ふざけんな！！！テメーのせいで母さんは死んでんだ！！！

それでどれだけ苦労してきたと思ってる！？！？

今まで何してやがったんだ、この野郎！？！？！？

「お前がその年齢（とし）になるまで待ってたんだ。待ってたんだよ。」

どういう意味だ！？待ってたってなんだ！？

おい！なんなんだよ！？

「・・・・・フ・・・・ファハハハハハハ！！！

あーはっはっはっはっはっはっは！！！！」

おい！待てよ！！待てよコラ！！！！

いきなり親父は笑い出して去っていった。

気味の悪い夢だった。

第6話　悪夢（後書き）

今までメッセージが届いていないです。

みなさん、よろしくお願いします（ＴＡＴ）

第7話　死

「昨晩はよく眠れましたか？」

クルエル・・・・朝からウゼェよ・・・・。

俺は再び、昨日のクルエルの部屋に連れてこられていた。

昨日は全然よく寝れたよ。でも悪夢にうなされたよ。

夢には親父が出てきて、気味悪く高笑いするし。

・・・・親父の顔は覚えてないから

親父かどうかははっきりしなんだけどな。

でも生まれて１６年、親父の夢なんて一度もみたことなかったのに。

なんで突然・・・・？

俺には嫌な予感がする。

「まあ、そんなことはどうでもいいんですが。」

お前が聞いたんだろうが！！

・・・・あれ？

「そういえば華と星南はどうしたんだよ？」

今日はあの二人がいない。

「ああ、あの二人は学校ですよ。あ。あなたはいいんですか？」

「俺は学校には行ってねぇよ。」

「そうなんですか♪」

なんで嬉しそうなんだ。

それにしても学校に行ってることもわからなかったとは・・・・。

結構な間、学校なんて行ってないからな。

「じゃあ、早速死んでもらいましょうか♪」

いきなりそれか！！

「ちょっと待て！昨日聞きそびれたことなんだが、

死ぬってどういうことなんだ？」

「まあ、死ぬと言っても仮死状態にするってだけのことです。」

軽々しく言うんじゃない！！

仮死状態になんてなったことないわ！！

「あなたの力を測定すると言いましたが、正しくは覚醒させる、と

いうことです。

仮死状態になると、あなたの精神(こころ)は深層意識の底に潜っていき、あなたは眠っている力に気付くはずです。

これを目覚めさせること、つまり『覚醒』です。」

「その力ってのが超術か？」

「そんなようなとこですが、実は少し違うんですよ。」

何？違うのか？

「我々は超術を使うための力を『燃料(フュエル)』と呼びます。

それを扱う術を超術と呼ぶんです。」

また知らないことが・・・・。

この世界にはどれだけの不思議があるんだ？

この調子だと、ゴジラも本当に存在してそうだ。

「じゃあ、眠っている力ってのはその燃料(フュエル)か。」

「その通りです。しかし、この力を覚醒させるにはリスクが伴うんですよ。」

はあ！？

お前説明が不足しすぎ！！！

なんでそれを昨日説明しなかったんだよ！？

「リスクだと？なんだそれは？」

「仮死状態になって深層意識にもぐったとき、ある一定の確率で燃料（フュエル）の力に

押し負けて、そのまま取り込まれてしまう者がいるんです。」

なにぃぃ！？つまりは仮死ではなく、本当に死んでしまうということか！？

「取り込まれるとどうなる？」

「体が燃料と融合してしまい、あなた自身が巨大な燃料の塊となります。

制御を失った燃料は暴走し、破裂します。」

破裂？・・・破裂だと？つまりは爆発するってことか！

「・・・・その確率ってのは？」

「約５０％ですね。成功するかしないかなんて運次第です。」

五分五分かよ・・・・。

「大丈夫なのかよ？」

「そんなこと、私が知るわけないじゃないですか。」

おい！！！！！

「なあ、くるえｒ・・・」

「じゃ、死んでください♪」

え？

俺の左胸に冷たい何かが入ってきた。

そこから血が溢れ出て、足まで流れる。

見えないなにかが引き抜かれる。

ブシュウ

血が吹き出る。

なにかは俺の目には見えなかった。

ゴフッ

肺が傷ついたようだ。

吐血が止まらなくなった。

膝、腰の順にガクッと曲がり、前向きに倒れた。

俺の周りの床が赤く染まっていく。

俺の体も赤く染まっていく。

ああ・・・・紅ぇ・・・・・

真っ紅だ・・・・・・・・・

いきなり疲労がきた。

疲れたなぁ・・・・・・・・

もう寝ようか・・・・・・・

あ、でもさっき起きたばっかか・・・・・・・

ま・・・・いっか・・・・・

俺は、目を閉じた。

第8話　光の中

目が覚めたのは光の中だった。

ど・・・・どこ・・・・だ？

喋れない。

口は動くが、言葉が出ない。

俺は死んだ。

俺は死んだ？

俺は死んだ！

違う！！俺は死んでなんかいない！

そう思った瞬間、声が聞こえた。

『ようここまで来れたのう・・・・・。』

・・・・誰だ？

バサバサバサバサ！

気付けば周りには・・・・・鴉？

烏の群れが俺を取り囲んでいた。

なにかヤバイ感じがする・・・・！！

『ここに来た理由はわかっておるわ。』

ばらばらに飛んでいた鴉たちが一箇所に集まり始めた。

集まった鴉はだんだんと人の形になっていく。

一羽一羽が体になっていく。

そして最後の一羽が顔になった。

なんだ、このおっさん？

『わしの開放、つまりは貴様の覚醒じゃろう。』

待てよ！！俺はまだ何も言っちゃいねぇ！！

『なんだ？不満そうじゃのう？』

まずおっさん、お前は何者だ？お前は俺のなんなんだ？

『わしがなんなのか知りたいのか。

わしは貴様の燃料・・・・。貴様の力じゃよ。』

燃料って人型なのか？いや、烏か。

『せっかくじゃから、貴様の力もみせてもらおうかの！』

ゴウ！！

いきなり赤い力が吹き出した。

な・・・なんだよ、今のは！！

『この拳を受け止めてみろぉ！！』

無理だろ！！

あ、体は動く！！

『むん！！』

ドゴォン！！！

ブシュウ！！！

物凄い爆発音とともに俺の血が吹き出る。

かすったが、なんとか避けれた。

な・・・！

ふざけるな！！！！

こんなヤツのパンチなんて受けれるか！！！

ダッ！！

俺は走り出した。

今まで逃げたことなんざなかったこの俺が。

そう思ったら、情けなくなってきた。

畜生畜生畜生畜生畜生！！！！！！！！

貴様なんざ！貴様なんざ！！！

情けなく思ったら恐怖が消えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

覚悟を決めろ！喧嘩は相手が強けりゃ強いほどゾクゾクするだろ？

ギリギリな喧嘩ほど楽しくてしょうがないだろう！？

行くぞ！！！

俺は走るのをやめた。

クルッ

飛び掛ってくるおっさんのほうを向いた。

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！

俺は、全力を込めて拳を前に突き出した。

ビシィ！

おっさんの拳は俺の右頬をかすった。

ぐお！

その衝撃は体全体に伝わり、脳にも届いた。

脳が痺れるような痛みが体を貫いた。

ぬ・・・・あああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！

バギャン

鈍い音が俺の目の前で響いた。

めきめき・・・・・

俺の拳はおっさんの顔に当たった。

にやっ

おっさんは怪しく笑う。

俺にはもう体力が残ってない。

ハア、はあ、はあ、はあ・・・・・・ダメか・・・・・。

『ガハハハハハハハハハハハ！！！！！』

いきなり大爆笑？狂ったか？

『まさか反撃するとはのう！！！！

大した若造じゃ！！！！気に入ったぞ！！！！

合格じゃ！！望み通りにしてやろう！！！！』

コオオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・・・・

眩しい光が再び俺を包み込んだ。

『・・わしの名は・・・・アモン・・・・

再び会うことになるだろう・・・・。』

俺はまた、目を閉じた。

第9話　わずかな休息

「うあ！」

目が覚めて一番最初に目に入ったのは

華の驚いた顔だった。

「総統！星南！ウサっちが目覚めたよー！」

ウサっちって・・・・・。

んなことはどうでもいい。それより、体が動かん。

「俺はどうしたんだ？」

「あ、動いちゃダメだよ。死んだ時の怪我治ってないし、

深層(なか)意識での怪我も軽いモンじゃないよ。」

あの光の中のことか。あそこで怪我すると現実の体にも影響がでるのか・・・。

ガチャ

部屋の扉が開き、星南とクルエルが入ってきた。

「目が覚めたのね。・・・ったく、もうちょっと体を大事にしなさいよ。」

星南は少し呆れたように言う。

「やーっとお目覚めですかー。」

クルエルは相変わらずウゼェ。

「俺・・・・死んでからどれくらい寝てた？」

「丸々2週間寝てたのよ。このまま起きないかと思ったわ・・・・。」

2週間！？！？

そんなに寝てたのか・・・・。

「でも、まだ寝てなきゃダメですよー？

ま、もう平気でしょうがね♪」

「どういうことだ？」

全然平気じゃねぇよ。体が動かないんだしよ。

・・・・あれ？動く？

「あ・・・・・・。」

腕をくいくい動かしてみる。体に支障は見当たらない。

「覚醒すると回復能力が上がるのよ。

それにしても凄い回復ね・・・・・。こんなの見たことないわ・・・・。」

「覚醒した直後というのは、信じられない力がでるものですよ。

あなたのときもそうでしたよ。」

・・・・燃料ってのは俺の想像を超えてる力があるようだ・・・・・。

「さて、この調子だとあと2日ほどでもう全快でしょう。

そうしたら、あなたの超術を見せてもらいましょう。」

「ま・・・・待てよ!そんないきなりできねーよ!」

「大丈夫ですよぉ♪

覚醒してしまえば超術は発現します。

では2日後、華と実戦していただきますね♪」

えぇ!?話が早すぎだ!!

「あ、超術使っていいの!?」

「どうぞどうぞ♪」

「いやったーーーーー!!!思いっきりやっちゃおっと!」

待て待て待て待て待て待て！！！！！！！！！

無理だって！！

「大丈夫よ・・・・。私のときは総統と戦ったから・・・・。」

星南が俺の耳元で囁いた。

・・・・・・・マジ？

だったら、大丈夫かな？

星南が言うしな。

「華の超術って何系だ？」

一応聞いてみた。また死んじまったらシャレにならんからな。

「あたしのは超能力系のヤツだよ。」

「華のは攻撃力高いですよ。

殺傷能力だけだったら世界でもトップクラスですよ。

本気になったら私を凌ぐかもしれません。」

！！！！！！！！！！

世界トップ！？

まずいって！！

「まあ、あなただったら大丈夫です。

私が保証しましょう。」

・・・・・・・・・マジ？

調子に乗せられてる気がするな・・・・。

「うっわーーーー！！！！

久しぶりだなぁ、超術使うの！！！！

メッチャ楽しみーーーー！！！」

・・・・・・本当に大丈夫なんだろうか・・・・？

第9話　わずかな休息（後書き）

今回は少し他の話とは違うと思います。
多少ほのぼのしてるかと。
できたらこの話に対する意見が欲しいです。
よろしくお願い致します。

・・・・・もっと頑張ります＾＾；

第１０話　模擬戦

・・・・・・・・・・・・二日後。

ここはあの駅のさらに地下。

天界（ヘヴン）、組織の訓練場らしい。

「さて、戦（や）ってもらいますよー♪」

クルエルが嬉しそうに言う。

俺は全快以上に回復していた。

――――――ドクン――――――

時間が経つにつれ、心臓の鼓動が強く、速くなる。

・・・・・・・暴れてぇっ！！！

今までになかった欲求が込み上げてくる。

「あたし手加減できないから、そこんとこよろしく♪」

――――――――――――――――ゾクゾクゾクッ

やべぇっ。

「じゃあどうぞ、始めてください♪」

「行くよ！！
飛雷（びらい）っっ！！！！！！」
華の前に突き出した両手から凄まじいスピードの青白い雷が放たれる。
普段だったら驚いてるトコだが、今の俺には関係ない。
見えるッ！！
体も動く！！
バシュウ！
俺のすぐ横を雷が通過していく。
それが床に当たって地面をえぐる。
拳に力を込める。
「おらぁ！」
ブゥン

俺の拳は華の残像を貫いた。
華自身がその雷より速く動いてる。

「なかなか速いんじゃないですか？」
星南が言う。
「そうですが、まだ超術は発現しませんね・・・・。
それより、華さんは体が鈍ってしまっているようですねぇ。
あれじゃいつか捕まりますよ。」
クルエルは厳しい判断を下している。

「おおおおおおおお！！！！！」
「おっと！」
最初はかすりもしなかった拳が、だいぶ惜しいところまで届くようになってきた。

「うおらぁ！！」

「！！！」

ガッ！！！！

俺のパンチを避けた華に、俺の蹴りが入った。

ガードされたが、手応えはあった。

しかし・・・・・・・・。

「へぇ、やるじゃん♪

でもあたしをＫＯしたきゃ超術を使いなよ。でなきゃ無理だよ？」

・・・・・ちっ。

俺は超術の使い方なんざ知らねぇ。

どうしろっつーんだよ・・・・？

『わしが必要か？』

！？

いきなり“俺の中”から声がした。

・・・・！

・・・・俺の力は俺の中にしかないってわけか・・・・・！

俺は目を閉じた。

・・・・・・・・おっさん・・・・・・・・。

力を貸しやがれ・・・・・・・・。

『ガハハハハハ！！！少しは口の利き方を覚えたほうがいいぞ！！

わしの力を貸してやる！！！！

叫べ！！！若造ゥ！！！！！』

カッ！！

「変身（トランス）！！！！！！！！！」

俺は知らず知らずのうちに叫んでいた。

ブワッ！！

俺の周りを光が包み、風が起こった。

ビーッ！ビーッ！ビーッ！

突然警報が鳴った。

フシュウウウウウウ・・・・・

なんだよ？せっかく気持ちよくなれそうだったのによ。

「どうしたんですか？」

華がクルエルに聞く。

「・・・・どうやら、模擬戦はここまでのようです。

本番です。」

第11話　俺は力を手にした

ドゴオオオン！！！！！

いきなり俺の足元の地面が爆発した。

「おわっ！！！」

「ゴギャアアアアアアアアア！！！！！！！！」

な・・・・なんだ！？

土煙の中から現れたのは化け物だった。

「離れてください！！まだ超術が発動できないあなたでは

敵う相手ではありません！！！！！」

「おい！！コイツはなんだ！？」

「これは我々が悪魔（デビル）と呼ぶ生物です！！」

な・・・・天使がいりゃ悪魔がいてもおかしくはないが！！！

コイツの姿はまるっきり人間じゃない！！！

それは巨大な爪を持っていて、鋭い牙、さらに尻尾も持っていた。

まるで龍のようだった。

「ゴアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

「うあああ！？」

いきなり悪魔が華に襲いかかる。

ガシャア！！！

鋭い爪が地面をえぐる。

華はそれを素早く避ける。

・・・・・が。

ガッ！！！

「ぅぐっ！！」

尻尾が華の腹にめり込み、飛ばされる。

ズシャア！

「キャア！？華ぁ！！」

星南が華のもとに駆け寄ろうとするが、それをクルエルが制止する。

「華さんでも一撃でやられてしまうのに、

あなたが駆けつけても何の意味もありません。

回復はあれを倒してからです。」

「おい、クルエル！あんなのどーすんだよ！？」

俺は華に向かって走り寄りながら、叫ぶ。

フシュン

いきなりクルエルが倒れ伏している華の隣に現れた。

「悪魔（デビル）は天使の発する燃料を食します。

つまり、悪魔（デビル）は天使を食うんです。

あれは覚醒したばかりのあなたの強大な燃料（フュエル）に反応して来たんでしょう。」

だったらあれは俺が引き寄せちまったってことか！？

華が倒れてるのも、俺の所為なのか！？

「う・・・・おあああああああ！！！！！！」

俺は悪魔につっこんだ。

俺の所為なら、俺がこの手でなんとかしなくちゃいけない、と思ったからだ。

ゴッ！！

ガシャ！！

当然敵うはずもなく、俺は殴られて吹き飛んだ。

「ぐ・・・おお・・・・・。」

ち・・・・ちくしょう・・・・・・。

『・・・弱いな、若造。お前の力はこんなモノではないぞ。』

貴様は黙ってろ・・・！！！

貴様に俺の何がわかる・・・！！！

ゾワッ

そのとき、俺から燃料が吹き出した。

ピクン

悪魔がそれに反応し、こっちに向かってくる。

ガシャ・・・・ガシャ・・・・・ガシャ・・・・・

一歩ずつ近づいてくる・・・・・。

俺はゆっくり起き上がる。

・・・・もう相手が人間だろうが悪魔だろうが関係ねぇ・・・・・。

俺が死んだときの痛みはこんなもんじゃなかった。
恐怖はこんなもんじゃなかった！！！
それに比べちゃ、こんなもん屁でもねぇ！！
「・・・・変身（トランス）・・・。」
カッ！！
ボシュウウウウウウウウ！！！！！！
模擬戦のときよりも眩しく、力強い光が溢れ出た。
悪魔はそれに反応した。
「ゴギャアアアアアアアア！！！！！！」
その爪で切りかかってきた。
スパッ
ズン！
悪魔の右腕が宙を舞い、回転して地面に落ちた。
切れた腕から緑色の血液が吹き出る。
「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

バサ・・・・・・・

・・・・・・・変身(トランス)完了。

背中に生えた、漆黒の翼。

黒光りする、全身を覆う羽毛。

黄色く硬質化した肘から先の皮膚。

鋭く、巨大化した爪。

鈍く光る眼球。

「あれは・・・・・・鴉・・・・・・？」

「変身(トランス)・・・ですか・・・・・。」

「ゴ・・・・オオオオオオオオオ！！！！」

ギラッ！！

今まで見えなかった動きが、手に取るようにわかる。

体が軽い。

フシュン

ブシャアアアア！！！！！

一瞬で悪魔の体を切り裂いた。

・・・・・ズシン・・・・・。

悪魔は倒れた。

俺は・・・・力を手に入れた。

第１２話　保護してやる

「はは・・・・これが俺の力か・・・・・。」

燃えるように力が湧いてくる・・・・・。

はは・・アハハハハハハ・・・・・！

ズキン

「ぁが！！」

全身に電撃のような激痛が走った。

「ぐ・・・・おあああああああ！！！！！」

ズズズズズズズズズ・・・・・・・・・

背中に生えた翼が縮んでいき、体の中に戻っていく。

全身に生えた黒い羽毛も肌色に変化して消えていく。

「か・・・・はっ・・・・・！

ハア・・・ハア・・・・ハア・・・・・。」

「大丈夫？超術は強大な力だけど、体には凄まじい負担がかかるの。

訓練を積まないと体がボロボロになっちゃうわよ。」

ほ・・・・星南・・・・・・。

ゼェ・・・ゼェ・・・・・ゼェ・・・・・・。

もう・・・・しゃべれ・・・・・ね・・・・ぇ・・・・・・よ。

「もう喋れもしないのね・・・・・。

じっとして・・・・・。ハッ！！！」

ブウン・・・・・・。

星南の両手が温かいオレンジ色に光る。

それを俺の頭と胸に押し当てた。

フオオオオオオオオ・・・・・・・・・！！！！！！

フシュウ・・・・・。

「はい終わり。もう動くでしょ？」

お？

おお！

「星南、今のなんｄ・・・・・。」

もうそこに星南はいなかった。

華のところに行ってしまったようだ。

・・・・・・今のは華よりも速かったんじゃねぇの？

「星南もやるでしょう？」

「おわっ！！」

いきなりクルエルが現れた。

「驚かすな！」

「まあ、いいじゃないですか。

そんなことよりも、どうしますか？」

「なにがだ？」

「最初に言ったでしょう。

我々の組織、天界（ヘヴン）に入りますか？それとも入りませんか？」

・・・・・・・・・・あ。

「言っておきますが、今のあなたは超術を発動したばかりで

燃料（フュエル）をうまくコントロールできていません。

それは悪魔（デビル）を引き寄せることになんですよ？」

わかりやうく言えば・・・・・

「・・・・・“保護してやるから力になれ”ってことか。」

「その通りです♪」

ち・・・・してやられた。

こんなもん断れるわけがねぇ。

さーて・・・・どうするか・・・・・。

そこに星南と華が歩いてきた。

「どうしたの？」

「ごめんねー。油断してたわ・・・・・。」

「気にしなくていいですよぉ♪

桜木君がぜーんぶやってくれましたから。」

「えぇ！？何系何系？」

興味津々だなぁ、おい。

「変身（トランス）だ。」

「・・・・・マジ？」

「マジ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・間。

「ウサっち絶対天界(ヘヴン)入ったほうがいい！！

超術に恵まれてるよ！！！」

意味がわかんねぇよ。

華はそのままの調子でずーっと喋ってる。

・・・・うるせぇ・・・・。今までぶっ倒れてたくせに・・・・。

「・・・・また明日、同じことを聞きます。考えておいてください。」

クルエルがボソッと耳元で囁いた。

「わかったよ・・・・。」

少しムカつくがこればっかりは逆らうわけにはいかねぇ。

よく考えるしかねぇな。

その夜。俺はまた夢を見た。

今度は親父の夢じゃなく、アモンの夢だった。

『やっと力が発現したようじゃのう・・・・。

だがの、あれは貴様の力のほんの一部にすぎん。

貴様は普通ではないぞ。それを忘れるな・・・・・・・。』

アモンはそれだけ言って消えた。

・・・・・・俺は何者なんだ？

・・・・・・わからなくなっちまった。

第13話　トライデント誕生

明朝。

「さあ、返事を聞かせてもらいましょう。」

またこの部屋か・・・・・。

ここは例のクルエルの部屋。

俺、ここと訓練場以外行ったことないぞ？

「天界（ヘヴン）に入りますか？」

俺は昨日、超術を発動した。

一度超術を発動してしまうと、

燃料（フュエル）と呼ばれるエネルギーを喰らう悪魔（デビル）に狙われる。

そのために特殊な訓練を受けなければならない。

・・・・・・・・・・らしい。

俺の出した答えは・・・・・。

「悪いが、俺は利用するのは好きだが

人に利用されるのは好きじゃないんでな。

断らせてもらう。」

「！？

今のあなたでは三日と持たずに悪魔に喰われますよ？

それでもいいんですか？」

「ま、俺でももう一度死ぬなんてゴメンだからな。

俺がお前らを利用してやる。」

バン！！！

「どういう意味！？」

いきなり華と星南が部屋に入ってきた。

「ちょっと桜木君！利用するって・・・・！」

「思ってみりゃ、俺がどんな能力を持っているのかもわからないのに

スカウトしたなんておかしな話だ。お前ら、何か隠してるだろ？」

・・・・・・・・・・・・・・・。

沈黙しているところを見ると、やはり図星か。

さっきのクルエルの驚きようもらしくない。

「・・・・随分と鋭いですね。

その通りです。私はあなたに隠していることがあります。

華さんも星南さんもですよ。」

やっぱりな。いくら潜在能力が凄かろうが

いきなりこんなトコに連れて来る訳がねぇ。

「で、隠してることってなんだ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

おい！さっきよりも間が長い！！

「なんなんだよ？もうここまできたら

驚くことなんてねぇんだからよ。隠す必要もねぇよ。」

「・・・・・これは驚く驚かないの問題じゃないのよ。」

星南は申し訳なさそうな顔をする。

華も珍しく落ち込んだような表情を見せている。

「すみませんが、これだけは隠し通させてもらいます。

お話しすることができません。」

ちっ。

クルエルが真剣な顔で謝った。

本当に話すことができないみたいだな・・・・。

「わかった。じゃあ、話さなくてもいいさ。

ただ！俺を保護しろ。

その代わりに力は貸してやる。」

同日、正午。

「バッッッッッッッカじゃないの！？！？！？！？！？！？」

あんた自分で何言ったかわかってる！？！？！？！？」

「華、うるせぇよ。知るわけねぇだろうが。」

あのあと俺と華と星南はクルエルに部屋を出るように言われ、

俺の泊まってた部屋に移動した。

「ふん。どうなろうが俺は俺のやり方でいかせてもらう。

別に殺されるなんてことはないんだろ？」

「それはそうだけど・・・・。」

やっぱりこいつら、なぜか知らんが俺を欲しがってる。

隠してることは間違いなくそれに関係することだろう。

「桜木君。あなたは十中八九天界(ヘヴン)に入ることを

許可されるわ。あなたの身の安全も保障される。

だけど、あなたは“力になってやる”って言った。

その意味はわかってる？」

「知るかそんなもん。」

「あなたも私たちと同じように任務に就くってことよ。

任務？なんだそりゃ？

「まだ話していなかったわね。組織員は二種類いるわ。

一つは特殊訓練されたそれ専門の戦闘部隊、神の閃光（ゴッドシャイン）。

もう一つはこの世界に存在する天使の確認と管理、

つまりはデスクワークを専門とする神の知恵（ゴッドノウズ）。

あなたはほぼ間違いなく神の閃光（ゴッドシャイン）の方に配属されるわ。

あなたも戦闘要員となって、緊急時には出動することになるのよ？」

「戦闘？何と戦う？」

「悪魔（デビル）とに決まってるじゃん。

それ以外にあたしたちが戦闘対象にできるもんはないよ。」

あ・・・・あんなもんが世界にありふれてるってことか！？

嘘だろ！？

「あれは主に喰うのが天使なんだけど、天使の血を引く人間は数え切れない。
あたしたちみたいに覚醒できる人なんてほとんどいないから、対抗する力なんてあるはずもない。
だから放っとくと犠牲は際限なく大きくなって、一つの国が丸々滅びたこともあった。
だからヤツらを相手にするのが仕事になるんだよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「い・・・・・・・。」

ガチャ

俺の部屋にクルエルが入ってきた。

「桜木君の正式な組織員となる許可が下りました。
たった今からあなたは天界（ヘヴン）の組織員、配属は神の閃光（ゴッドシャイン）です。
で、これが組織員のＩＤカードです。」

・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・いいぜ。やってやる。

もともと引き返すことなんてできねぇんだ。

思いっきり暴れるからな。覚悟しろよ。」

「あ、それから神の軍団（ゴッドメシア）は三人一組で動くことを義務付けられますが、

桜木君は華さんと星南さんとチームを組むことにしておきました♪」

・・・・・・・・・・・・・・。

「え？」

「えええええええええええええええ！？！？！？！？！？」

突然二人が驚きの声を上げた。

「ま、よろしく頼むぜ。」

「ちょっと総統！！あたしたち、ずっと二人だけだったじゃないですか！？」

「そうですよ！！いきなりそんなこと言われましても・・・！」

「それはあなたたちが承諾しなかっただけでしょう。

せっかくの機会ですからチームを組ませておきました♪」

残念ですが、これはもう組織が決定したことです。
今更変更はできませんから♪」
「そ・・・そんなぁ・・・・・。」
「はぁ・・・・それじゃ、仕方ないですねぇ・・・・・。」
二人は不満そうだ。
おい。そんなに俺が嫌か？そんなに俺が嫌なのか？
それにせっかくかっこいいこと言ってみたのにスルーか。
「さて。じゃあチーム名を決めましょう。
せっかくですからカッコイイのにしましょうね♪」
「しょーがないなー・・・・・・
じゃあ、対悪魔用特別スーパーウルトラＤＸ・・・・・。」
「長い！
三叉（トライデント）の槍ってのはどう？
私、華、桜木君で三種類全部の超術が揃ってるわけだし。どう？」
華は置いといて、星南のネーミングセンスいいな。

「いいじゃねぇか。俺は変身(トランス)を極めるからな。」

「・・・・・・そ・・・・・それ！それいい！！かっこいい！！」

華は少し悲しそうな顔をするが、すぐに目を煌かせた。

・・・ホント単純なやつ。

「じゃあそれで決まりですね。

これからよろしくお願いしますよ、チーム“三叉の槍(トライデント)”。」

「よろしく、ウサっち！」

「改めてよろしくね、桜木君。」

「おう、よろしく頼むぜ。」

これからは俺らはチームだ。

一緒に楽しく暴れようぜ？

第１３話　トライデント誕生（後書き）

やっと物語が動き始めます。
これからもゆっくりと動く予定です＾＾；
なにかと進行の遅い小説ですが、よろしくお願いします。

コメントもお願いします＾＾；

第１４話　成長

「だあああああああああ！！！！！！！」

ドガァァァァン・・・・・

ガシャァァァァァン・・・・

「おおっと。今のは少し危なかったわね。」

あれから一週間が経った。未だ任務には就いていない。

でもだいぶ天界のこと、超術のことがわかってきたぜ。

いろいろと説明を受けたしな。

今は通常状態で星南と現在進行形で修行中。

俺はある程度超術を自由に発動できるようになって

その状態を維持できるようになった。

なんか変身（トランス）状態での新しい力も発見したし。

「そんなんじゃ悪魔には太刀打ちできないわよ！

強化（カスタム）！“腕（アーム）”！！」

ヴゥン！！

星南の腕がオレンジ色に光り、形が変わった。

今度は何になった？

ドゴッ！

「ブッ！！」

変化した腕の拳が俺の顔面にめり込む。

・・・・・ちっ。今パンチが一瞬加速した。

速いうえに強い。

「そんなんじゃダメだって言ってるのよ！

今まで教えてきたことを思い出して！！

それに本気でやらないと修行の意味がないでしょう！？」

・・・・・・ペッ。

もう少しいける気がしたんだけどな。

やっぱ無理か。

――――――――――――――――――――フゥ。

五日前明朝。

俺は三叉(トライデント)の槍のメンバーと訓練場にいた。

「さて。じゃあ、これから任務の要請があるまで

あたしと星南が交代でウサっちと戦闘訓練をするからね。

やっぱりウサっちは実戦で育つタイプでしょ？」

・・・・・まー、そうかな。

でも、軽い説明があると楽なんだが。

「ちょっと待ってくれよ。そうかもしれないけど少し説明してくれ。
超術のコツとかさ。」
「んーとね・・・もう大体説明したんだけどな・・・・。
超術の基本種類は説明したよね？
全ての超術に共通することは使用する燃料（フュエル）の量で
威力とか効果が変わるってこと。
多ければいいってもんじゃないらしくて、
微妙な調整が重要！・・・・・って星南が言ってた。」
ほうほう。
「そういうこと。
超術を発動するときのコツとして“戦意を呼び覚ますこと”が大事よ。
超術は悪魔（デビル）と戦うための力なんだからね。
戦う意志がないと話にもならないわ。」
戦意か。

・・・いまいちピンとこないな・・・・。

今まで喧嘩は散々してきたが、その場のノリでなんとかしてきたしな。

「あ、これは天界（ヘヴン）の話だけどね、

世界各国にこの組織があることは知ってるね？

チームってのはそれぞれ国単位で所属が決まってるの。

活躍に応じて称号も与えられるし、色々と特することもあるらしいよ。

最初は“下級天使”。最後には救世主の称号を与えられるって言われてる。」

じゃあ、俺ら三叉（トライデント）の槍は日本支部所属の下級天使ってことか。

「説明はこんなとこ。

じゃあ今日はあたしが相手するからね！！

本気で来ないと死んじゃうよ！！！！！」

「・・・・・おお！！！！！」

・・・！！！！！

「――――――――――――――――行くぜ。」

バシュウッ！！！

変身完了ッ！！

訓練のおかげか変身にかかる時間は随分と短くなった。

ヴァサッ！！

俺は変身完了と同時に翼を広げて飛翔した。

キュウウウウウウウ・・・・・・・・・！！！！

ゴアッ！！！！！

俺の口から真っ赤な光線が放たれる。

「強化(カスタム)！！“全身(ボディ)”！！！」

今度は星南の全身がオレンジに光った。

体が硬質化したようだ。

ギャン！

ドゴオオオオオオオ・・・・・・・・

俺が放った光線は片腕で弾かれてしまった。

「ちィッ！」

「はい、ストーップ。今日はここまで！！」

横で見ていた華がストップをかけた。

おっと、もうそんな時間か。

バシュン・・・・・

俺は変身を解いた。

フシュウ・・・・

星南も強化を解いた。

「どう？ウサっちは？」

「・・・・凄まじいスピードで成長してるわ・・・・・・。
本気でやらないと私たちが危ないわ。」
「え？だってさっきの光線、ウサっちの最大攻撃技だったはずだよ？
今星南片腕で弾いたじゃん。」
「そうだけど・・・・・・・・。」
ボタボタッ・・・・・！ボタッ・・・・・！
「・・・・・！」
「片腕で弾いた、その代償よ。」
星南の腕は激しく出血していた。
桜木君・・・・あなたはどれだけの力を隠しているの？
「医務室に行こう。早く治療しないと・・・・・。
今日はもう燃料（フュエル）使わない方がいいよ・・・・。」
「そうね・・・・・。」
「ウサっちーーーーー！！！
あたしたち、先に行ってるからねーーーー！！！」

「お？おう！！」

・・・・・ふう・・・・・。

少しは慣れてきたな。

もうちょっとで何かを掴める気がする。

・・・・・さて、今日は早めに寝るとしようか。明日も早いだろうし。

てか、任務はないのか？

これで修行を始めてから五日が経った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・さっきの光線は“滅却（イレイザー）の矢”と名付

けよう。

第１４話　成長（後書き）

まーた進行が遅くなりました。

スイマセン・・・・・・。

第１５話　初任務１（前書き）

今回は非常に長いです。

読みにくいかもですが、すいません

第15話　初任務1

「じゃあ、今日は任務をやってもらいましょうか♪」

「おお！！やっと任務かよ！！」

「やったぁ！！任務任務♪」

「任務ですか。内容はどんなですか？」

俺ら三叉の槍（トライデント）はクルエルに呼び出され、また例の部屋にいた。

「任務内容は簡単なものです。

悪魔（デビル）共のアジトが新しく発見されました。

任務はそのアジトの壊滅、および悪魔（デビル）の全滅です。

力の使い方も覚えた桜木君もいるわけですし、楽勝でしょうがね。

さくさくっとこなしちゃってください♪」

「はーい♪じゃ、行こう！！」

「おう！！！」

「はい、待っーた！その前に着・替・え！」

行こうとした俺と華を星南が制止した。

へ？着替え・・・・？

「えーっ？だってアレ、なんか嫌なんだもん。」

「文句言っちゃダメでしょう？規則は規則！」

なにそれ？制服でも・・・・って隊なんだから制服くらいあってもおかしくないか。

「あ、そういえば桜木君の制服は？」

「もう出来上がっていますよ。はいどうぞ。」

そう言ってクルエルが手渡したものは・・・・・・アームカバー？

真っ黒で、手首の辺りに何かカードリーダーのようなものが付いている。

「そこの手首のところに付いている機械にあなたの

ＩＤカードを差し込んでください。」

俺はこの前渡されたカードを取り出し、機械に差し込んでみる。

シュオッ

一瞬で俺の服が変わった。

「おおっ！！」

真っ白な服だった。

真っ白の長いズボンで、真っ白の長袖のシャツの上に真っ白のジャケット。

信じられないくらい軽く、まるで着ていないみたいだった。

スッゲェ！！

「それは天使の絹（エンジェルシルク）って呼ばれる繊維で編まれていて、

あらゆる衝撃に強い耐性を誇るわ。もちろん超術にもね。

変身（トランス）とか強化（カスタム）するときには体と同化する特性もあるのよ。」

おお！それは助かるな！それ、結構気になってたんだよ。

修行ではすぐに服ボロボロになっちまったしよ。

「てか、男子の制服ってそんなんなんだー。

女子とほとんど変わんないね？ほら。」

シュオッ

「そうね。ちょっとラインが入ってるくらいだね。」

二人も“着替え”た。

違うところは腕に空色のラインが二本入ってるってだけ。

「デザインには違いないのな。」

「でしょ？ま、これはこれでいいんだけどねー。」

「じゃ、もう行くわよ。総統、アジトまでの地図を。」

星南はクルエルから透明な紙のようなものを受け取り、

俺らを行くように促した。

「はーい♪」

「おう。」

――――――――――――――――――――――――数時間後。

「着いたー・・・・。遠い・・・・。疲れた・・・・。」

「たった二時間歩いただけでしょう？文句言わないの。」

「いや、二時間は遠いぞ？」

星南はへたり込む華を無理矢理起こす。

言われるままについてきたけど・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・ここ日本？

俺らがいるのは、廃墟ビルの目の前。

もう辺りは暗くなり始めてる。

「さ、行くわよ。」

「はーい・・・・・・。」

・・・・・・・・・・ズズン・・・・・・。

「お？」

今なんか揺れなかったか？

地震じゃなくて、なんかこう・・・・腹に響く感じの？

「ウサっちー！！置いてくよー！！」

「あ、待てよ。待てって！！」

タッタッタッタッタッタッタッタッタッタッタ・・・・・・・・

中は一層薄暗く、不気味な雰囲気だった。

悪魔をバリバリに感じる。

――――――――――――いる。それもかなりの数だ。

俺らは廊下を歩いている。

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

「かなりたくさんいるね。」

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

「そうね。ほとんどは雑魚だけど。」

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

――――――――――――――――――――――――――――待て。

なんかいるぞ？なんかいるぞ！！！

俺はまた何かを感じた。それはビルに入る前に感じたものと同じだった。

この腹に響く感じは普通じゃなかった。

「おい！なんか変なのがいるって！すげぇのがいる！！」

「？いるわけないって！！！まだあたしたち新米なんだよ？

そんなのがいる任務はまわってこないよ。」

「華の言うとおり。そんなのはいるはずがないわ。

私と華は１２歳から組織にいるけど、総統から直接依頼された任務は今回が初めてなの。」

・・・・・そっか。いるわけないか。

「とりあえず雑魚は片しておこ。
強いのがいたとしてもそっちのが楽だよ。」
そーだな。さっさと片しておきたいところだ。
だが、さっきから気配を感じない。
いるはずなのにいる気配を感じない。
これはどういうことだ？
「何でかしら？感じるのに悪魔（デビル）が一匹もいない・・・・。」
「おかしくない？こんなの初めてだよ？」
二人も同じ疑問を抱いたようだ。
もう中に入って３０分は経ってる。
ここは悪魔のアジトなんだろ？しかも俺らはあいつらにとっちゃ喰いもんだ。
なのにでてこないなんて明らかにおかしい。
「待て。これ以上探してもたぶん無駄だ。
ここには他に何かが隠れてそうな場所はないのか？」

「ないわよ。ここは地下もないし、ただの廃ビルよ。」

ビーッ

いきなりアームカバーの手首の機械が鳴った。

『もしもーし。聞こえてますかぁ？』

クルエル・・・・・。

これ、連絡用としても使えるのな。

「はい、聞こえてます総統。」

『そっちはどうなってますか？』

「こっちは全然悪魔(デビル)が見当たらねぇ。

これは一体どういうことだ？説明しろ。」

『おかしいですね。こちらからはそこに悪魔(デビル)反応も

あなたがたの燃料(フュエル)反応も確認できています。』

反応が確認できようが、現場にはいねぇんだ。どうしようもないだろうが。

そのとき、ズズンと音がした。

「？」

「なに、今の？」

今のは・・・・・！

ズン・・・・ズン・・・・

音はだんだん大きくなり、近づいてくる。

ズン

突然、音が止まった。

薄暗い廊下の向こうの方で何かがキラッっと光った。

その瞬間。

ボッ！

赤い光球が飛んできた。

バッ

かわしたが、今のは間違いなく悪魔の攻撃だ。

気配もなかったのに？

「今のって悪魔（デビル）だよね！？

でも気配を感じなかったよ！？なんで！？」

「わかんないわよ！でもそこにいることはわかったでしょ！！」

「たしかにねっ！！飛雷（びらい）ッッ！！！」

華がお得意の飛雷（びらい）で反撃する。

バギャン

飛雷（びらい）は壁を貫通した。悪魔には当たっていないようだ。

「あれぇ！？当たってない！！なんでなんでぇ！？！？」

華が怒るのも無理はない。

今のタイミングだったら、必ず当たっていたはずだ。

飛雷（びらい）のスピードは俺も熟知している。

なんでだ？

―――――――――――――――――――――――――――――――！

「――分解能力か？」

「？分解？」

星南が首をかしげる。

『その可能性はたしかにありますね。』

「だとすると厄介だ。攻撃を当てにくい上に、
相手を見つけるのが難しい。薄暗い中じゃまず無理だ。」
「ちょっと！どういうこと？」
華が突っ込む。
「だから、相手が複数の別の動物かなんかに分解できる能力を持ってるかもってことだ。
何に分解できるのかわからないと攻撃できない。」
「なるほど・・・・。」
華は理解したようだが、首をひねっている。
星南は早速打開案を思いついたようだ。
「とりあえず敵が見えればいいのよね。
強化（カスタム）！“眼（アイズ）”！！」
お、俺と同じ考えだ。
こういう場合、まず相手が見えないことにはどうしようもない。
どこから攻撃してくるかわからないし、相手が何に分解するかもわからないからだ。

つまり、見えれば相手がわかる。
そうすれば攻撃もできる。
「変身(トランス)！」
キィィィィン・・・・・・・・
「ウサっち、眼が・・・・。」
俺は五日間の修行でいろいろと発見したことがある。
その一つが“部分変身”。
コツさえ掴めば、体の一部だけを変身させることなんて楽勝にできる。
二つ目が“それぞれの部位の能力”。
変身した俺の体は鳥の能力を手に入れることができるようだ。
眼がよくなったりな。
「「見つけた。」」
俺と星南が同時に言った。
あれは・・・・・・・虫か。

「・・・・・・いやっ！！！！！」

星南が悲鳴をあげてうずくまる。

・・・・・・・女の子だもんな。

虫が苦手のようだ。

しかし、アレは俺でも気持ちが悪い。

馬鹿でかいゴキブリみたいのがうじゃうじゃいる。

・・・・こりゃあ分解されちゃまずいな。

ゴキブリって速いんだよ。

「華！床、壁に放電しろ！」

「了ッ解ッ！！放電（スパーク）！！」

バリバリバリバリィッ！！！！！

ブチブチブチィ！！！

ゴキブリ共が次々に丸焦げになって潰れていく。

「キュウイイイイイイイイイ！！！！！」

気持ち悪い声が響く。

たしかに効いているようだ。

「うわわっ！？今の声何！？！？」

今度は華が悲鳴をあげた。

あ、そうか。華には見えてないのか。

「は・・・華ぁ・・・ご・・・ごきがぁ・・・・。」

「え？何？ごきがなんだって？」

星南は華にしがみついている。

華はそれを振りほどこうとするが、星南は動こうとしない。

・・・・・星南はもう使いもんになんないな。

『あっはっはっは♪

星南さんは相変わらず虫がダメですねぇ♪』

クルエルうるせぇ。

でも、ま。もう任務も終わりだろ。

華の放電は効果抜群だったみたいだし。

「キュイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！！！！

！」

「！！！！」

まだ生きてるか？

バリッ！ボリンバリン！！

・・・・何だ今の音？

第１６話　初任務２

ボリッ！！バリバリッ！！ボキンッ！！

不気味に何かが砕けるような音が廊下にこだまする。

「な・・・何？この音・・・・・。」

「い・・・いやぁ・・・・・。」

華と星南がおびえる。

なんだよ、この音は！？

キィィィィィィ・・・・・・・

俺は眼の感度を上げて、その音の正体を見極めようとした。

！？！？

・・・・おぇっ！！！

「・・・あいつら、何してんだ！？」

「え？何？何が見えたの、ウサっち？」

華が聞いてくる。

「あ・・・あいつら・・・共食いしてやがる・・・。」

「うぇぇ！？」

バキ！！ボリボリッ！！ベキンッ！！グシャ！！

くっ・・・嫌になるぜ・・・。一体何がしたいんだよ！？

ピクッ

「・・・・・！」

華が反応した。

「おい、どうした？」

「・・・何？・・・なんなの、アレは！？」

――――――――――――――――――――――ズズン

・・・またあの感覚がッ・・・！

目の前から・・・？

ゴキッ！！グシャン！！ビチャビチャビチャア！！

・・・・・・・・・・・・・・。

音が止まった。

「キシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

！！！！！」

ブアッ！

「うおおッ！！！」

「・・・・何！？」

「きゃあっ！」

ゴオオオオオオ・・・・・・・・・・

ビリビリ・・・・・・・

・・・・・・空気が震えてる。

叫び声だけでこんな・・・・？

カッ

また廊下の向こうが光った。

ギュオオオオッ！！！

その瞬間、デカイ赤い光線が飛んできた。

――――――――――――やべぇっ！！！

俺は躱せる。だが、星南は腰が抜けてて立つこともできん。

華には星南を抱えて走るだけの力はない。

――――――――――――――クッソぉ！！

「変身（トランス）っ！！！」

バシュウ！！

俺は変身して二人の前に仁王立ちした。

「う・・・・おおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

両腕に全霊の力を込め、向かってくる光線に突き立てた。

ギャリリリリリリリリリリリリリ！！！！！

俺の腕を中心に、光線が四方八方に散っていく。

「お〝お〝お〝お〝お〝お〝！！」

ギャン！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・

ハア・・・ハア・・・ハア・・・何とか弾き切れたか・・・・。

後ろの二人も無傷だ。

だが、弾いた光線は壁や床にぶち当たって、ビルが崩れ始めた。

ガラガラガラガラ・・・・・・・・

二人の上の天井が崩れ、降ってきた。

「「きゃあああああああ！！！」」

――――――――――――――危ねぇッ！！

バサッ！

ズン！

間一髪で二人を助け出せた。

降ってきた天井は床を突き抜け、下の階まで落ちていく。

「もうこのビルは駄目だ！！このまま外に出るぞ！！」

ヒュンヒュン！

俺は落ちてくる岩を躱しながら、廊下を飛んでいく。

「しっかり掴まってろよ！」

俺は更にスピードを上げた。

ギュン！

――――――――――――――ガシャン！

俺は窓を突き破って外に出た。

――――――――――――――――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・・・

・・・・ズズズズズズン

ビルは音を立てて崩れた。

「あ・・・危なかったぁ・・・・・。」

「・・・ギリギリね。桜木君、だいｊ・・・きゃあ！？」

俺の両腕からは血がボタボタと垂れていた。

くそっ。光線弾くのに少し無理しちまった・・・・。

「だ・・・大丈夫だ。それよりも、怪我はないか？」

「あたしたちは大丈夫だよ。ウサっち、早く治療しよう。出血が多いよ・・・・。」

ああ・・・そうだな。ビルは崩れちまったし、さすがにアレも死んだろ。

バサッ

俺は二人を抱えたまま地面に降り、変身を解除した。

バシュン！

ぜぇ・・・ぜぇ・・・ぜぇ・・・

ちくしょう・・・・出血で眼が霞む・・・・・・。

「星南！早く治療を！！」

「わかってるわ！フッ！」

ブゥン・・・・

星南の両手がオレンジに光る。

「ゼェ・・・それ・・・ゼェ・・・なんなんだ・・・ゼェ・・・？」

「これは分類不可能な超術。手で触れたものを回復できるの。」

星南はそう言って、自分の手を俺の両腕に押し当てる。

――――――――――――――――――ズン

「！！！！！」

まさか・・・・・。

「どうしたの？」

まだ・・・・・・。

「どうしたのよ？」

生きてるのか！？！？

「シャアアアアアアアアア！！！！！！」

粉々に崩れたコンクリートの山の中からの叫び声。

ドガン！！！

ガラガラガラ・・・・・・

コンクリートの山が爆発した。

土煙の中から、巨大な悪魔が現れた。

今度のは前のと違って、足が六本もある、巨大な龍だった。

・・・・今度こそ、マジでヤバイな。

「星南・・・もういいぜ。」

「え、ちょっと待って。もう少し・・・・」

「もういいっつってんだろ。アレをなんとかしねぇと・・・・。変身（トランス）！！」

・・・・とは言っても、全身変身を一度に二回は少しきついな。

でも、やるっきゃねぇ！！

喧嘩上等！！命の取り合いやってやるぜ！！

「行くぞバケモン！！お前はこの俺が殺してやる！！」

第17話　戦闘（前書き）

開花した兎の感覚。それは戦闘に特化したものだった。徐々に現れていく兎の才能。兎は一体何者なのか？・・・・・兎は戦闘を楽しむ・・・・。

第17話　戦闘

ズシャア！！ブシュッ！！

俺はまだ、あの悪魔と戦っていた。

――――――ははっ。こんな感覚は初めてだ。

華と星南との修行でもこんな感覚はなかった。

俺の血が吹き出る感覚。俺が悪魔の肉を引き裂く感覚。

何もかもが眼で追える。肌で感じれる。

――――――ははははははは。

「・・・ねぇ、あれ、ホントにウサっちなの？」

「あ・・・当たり前じゃない・・・・。信じ難いけど・・・・。」

華と星南は恐怖していた。

自分らでも戦ったことがないような、強大な悪魔と戦う兎の姿に恐怖していた。

桜木君はつい最近能力が発見されて、まだ修行を始めて一週間も経っていないのに。

・・・・・・・生まれ持った才能、戦闘感覚（バトルセンス）ってヤツね・・・・。

「見てよ・・・・。ウサっち、笑ってるよ？」

俺は笑ってた。

「オルァ！！」

ザシュウ！！

俺の爪が悪魔をえぐる。

「シャアアアア！！！」

ガツンッ！！

悪魔の尻尾が俺の顎をかちあげる。

・・・・ヨロッ

俺の体勢が崩れたのを悪魔は見逃さなかった。

がぱ

ドッ！

大きく開けた口から紫色の液体が吹き出してきた。

ビシャア

「ぐっ！」

俺は躱しきれずに、体の右半分に液体がかかった。

ジュウウウウウウ・・・・・・・！！！！

液体がかかったところに激痛が走る。

・・・・ッ溶解液か！？

体が溶け・・・・・！

「シャアッ！」

ドゴッ！ゴッ！ガンッ！

ぐあっ！！

悪魔の六本の腕が俺を次々に捕らえて殴る。

カッ

ゴアッ！

また光線を放つ。俺はもう反応できなかった。

「がああああっ！！」

ドドドドドドドドド・・・・・・・・！

「ウサっち！！飛雷（ひらい）ッ！！」

吹き飛ばされた俺を見て、華が飛雷（ひらい）を放った。

ビシィ！！

電撃は悪魔の背中に当たって弾き返された。

「・・・シャア！！」

悪魔は華に気付き、襲い掛かっていった。

――――――あぶねぇ！！

「華ぁ！強化（カスタム）！“腕（アーム）”！！」

今まで動けなかった星南が間に割って入った。

ドゴン！

星南の強化した拳が悪魔の顔面に命中する。だが・・・・・。

「・・・・キシャアア！！！」

まるで効いてない！！

「星南、逃げろ！！」

悪魔は今度は星南に殴りかかった。

「強化（カスタム）！！」

星南は今度は腕を硬化させ、そのまま悪魔の腕に向かって振った。

ガシャアアン！！！！！！！

――――鈍い炸裂音が響いた。

――――――ピシっ

強化した腕に亀裂が走る。

ビシッ・・・・パキパキ・・・・・

ブシッ

腕に入った亀裂から、鮮血が飛び散る。

「・・・・・あ・・・・・あああああああ！！！！！！」

星南が悲鳴を上げて崩れ落ちる。

ドサリ

「星南ぁ！！！！！」

今度は華が悲痛な声を上げる。

ちくしょう！！！ちくしょうがぁぁぁ！！！

「・・・・・お゛お゛お゛お゛！！！」

ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ・・・・・・・・・・・

俺は立ち上がった。

ボシュウウウ！！！！！

俺の体から燃料が吹き出した。

悪魔は俺の燃料に反応する。

再び俺に向かってくる。

「華！星南連れてどけぇ！！」

俺はそう叫んだ。

華は一瞬こっちを向いたが、すぐに星南に駆け寄った。

「喰らいやがれぇ！！」

キュウウウウウウン・・・・・！

ゴバァア！！！

ガガガガガガガガガガ！！！！！

「キィィィィィィィィィィ！！！！！！！！！」

ズガァァァァン・・・・・・

――――――――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・・

俺の最大攻撃技、滅却（イレイザー）の矢が直撃した。

・・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・

・・・・直撃だったら、少しはこたえるだろ・・・・・・。

ガクン

俺の膝がくだけた。

――――――――もうさすがに限界か・・・・。

「ウサっち・・・・。」

「も・・・・もう大丈夫・・・・のはｚ・・・・」

ガシャン！！

「キシャアアアアアアア！！！」

――――――――まだか！？まだダメなのか！？

ドパン！

いきなり悪魔の頭が弾け飛んだ。

シューーーーー・・・・

弾けた頭から血が吹き出、悪魔は倒れた。

ズズン・・・

い・・・今の一撃は？眼で追えなかった・・・・。

「おーう。危ないトコだったなぁ！」

「間に合ったじゃん？よかったねぇ！」

「・・・・うるさいよ。」

俺の後ろから声がした。

・・・・・・誰だ、こいつら？

第１８話　進化へ（前書き）

いきなり現れた“スパーダ”と名乗るチーム。
屈強な悪魔を一撃で倒す力は圧倒的だ。
その力に戸惑う兎だったが、その兎よりも劣等感を感じているのは・・・華だった。

第１８話　進化へ

「ヒュウッ！楽勝ぉ！」

「そりゃあそうだよ。こんな楽な任務久しぶりだったね。」

「・・・・二人、うるさい・・・・。」

――――――誰だよ、お前ら！！

純白のマントを着ている、全くタイプの違う男三人。

傷だらけの大男。マントがかなり擦り切れて、汚れている。

小学生くらいにみえるチビ。１５０ｃｍないんじゃないか？

無表情な眼鏡。本読んでるし。

「ウサっち！！」

心配そうな声で華が駆け寄ってきた。

「ハッ！こんな雑魚に惨敗かよ！？

クルエルのお気に入りだからって少し期待してたのによぉ！！」

「そういうこと言っちゃダメだって。

まだ神の閃光（ゴッドシャイン）になって一週間経ってないって聞いたよ？

ここまでできてるんだから凄い方だよ。」

「・・・・・・・。」

眼鏡はダンマリだが、チビが大男を落ち着かせる。

「き・・・貴様ら・・・・何者だ？」

「あたしからも聞きたいです。あんたたちは誰？」

俺と華が口をそろえて聞く。すぐに大男が口を開いた。

「おいおい！！先輩に向かってそれはないんじゃねぇ？！？

“スパーダ”って聞いたことあるだろぉ！？」

「悪いが、俺は聞いたことねぇな・・・・。」

修行漬けの五日だったからな。説明受けたのは組織のことだけだ。

他のチームのことなんざ聞いちゃいねぇ。

「す・・・・スパーダって言った！？」

華が驚きの声を上げる。

「し・・・知ってんのか？」

「その声は“雷撃の華”か！？

じゃあ、そっちに転がってるのは“時の星南”か！！」

「え！？じゃあ、あの二人は“天空龍の星華（せいか）”！？」

「・・・・今は三叉（トライデント）の槍の一員！

ウサっち、スパーダってのはね、世界屈指の日本有数チーム。

その攻撃能力の高さから、嵐の神“スサノオ”の称号を持ってるんだよ。」

・・・・・・・・・・へぇ。そんな称号もあるのか。

で、そんなお偉いさんが何しに来た？

こんな任務、さぞかし退屈でしょうに。

「クルエルさんの命令で来たんだ。

いきなり通信が途切れたもんだから救援に行ってくれってね。

怪我人もいるようだからもう行くよ。

ハル、お願いね。」

チビが眼鏡を呼んだ。

パタン

眼鏡は読んでいた本を閉じ、トコトコと歩いてきた。

「・・・・じゃあ、みんな集まって・・・・。」

眼鏡はボソッと言い、みんなが眼鏡を中心に、円を描くように集まった。

まだ気を失っている星南は華に、

怪我で動けない俺はあの大男に肩を貸してもらっていた。

「・・・・じゃあ、行くよ・・・・。」

眼鏡はしゃがみ、地面に手をかざした。

――――――――ボシュッ！！！！！

俺たちの周りの地面がめくれ上がり、俺たちを包み込んだ。

ぎゅうううううう・・・・・・ポン！

地面は俺たちをぎゅうっと握り込んだ。

・・・と思ったら、乾いた音がして俺たちは別の場所に飛んでいた。

「やあ、お帰りなさい♪

三叉の槍（トライデント）、スパーダの皆さん、お疲れ様でした。」

――――聞き慣れた声だ。

俺らの目の前にはクルエルと三人の組織員が深々とお辞儀をして立っていた。

「ったくよお！！こんな退屈な任務、あんたの命令じゃなかったら行かなかったぜ！！」

「それでも行って下さったじゃあないですか♪感謝していますよ。」

「総統！！」

「華さん、すみませんでした。まさか、あんなものが居るとは思っても見ませんでした。

それにあなたがたなら、と思っていたのですが・・・・。」

「あたしなら大丈夫ですから、星南とウサっちをお願いします。」

「了解しました。」

華の懇願で、俺と星南は他の組織員に運ばれた。

「では総統、我々は行きますね。我々には別の任務もありますので。」

そう言って、スパーダの三人は行ってしまった。

スパーダが行ってから、クルエルが口を開いた。

「しくじったようですね。腕が鈍りましたか。」

「・・・・・・すみません。」

華は半分泣きそうになってしまった。

「あたし・・・・・・。」

そこで言葉は詰まってしまった。

「今のあなたは、あの三人の中では最も劣ります。

発展途上で、安定していない。得意としている“飛雷”でさえ未完成な力だ。」

――――――わかってた。あたしが一番力になってないこと。

攻撃しかできない。その攻撃も通じなかった。昔はこんなじゃなかったのに。

――――――――悔しいっ

華の肩はフルフルと震えていた。眼からは涙が溢れてしまった。

それを見て、クルエルは思った。

（あなたの力はひどく未熟だ。今までの戦いで生き残れたのは才能と運だけです。

未熟な力は徐々に勢いを失い、いずれ消えていくでしょう。

実際にもう力は衰え始めてしまっている。

それを止めるには“進化”が必要だ。あなたにはそれだけの力がある。

私はそれを信じていますよ・・・・。）

その夜、クルエルと華が俺のところに謝ってきた。

任務であんなのが出てきたのは想定外だったようだ。

ま、とりあえず死ななかったからいいんだけどな。

とは言え、あの“スパーダ”ってのが来てくれなきゃ死んでただろうが。

怪我は命に別状はなく、特に後遺症もないそうだ。すぐに退院もできるらしい。

星南も気を失っているだけで、華も俺よりはよっぽど軽傷。

――――――ふう。任務って結構大変だな。もっと強くならねぇと。

あ、そういえばスパーダについて聞くの忘れてた。

何があったかは知らないが、そのときに見た華は落ち込んでいるように見えた。

翌日。俺はまた訓練場にいた。

さて、今日は何をするか。星南は検査が長引いてまだ病院だしな。

がちゃ

クルエルと華が入ってきた。

「おはようございます♪もうすっかりいいようですねぇ。」

「ウサっち、おはよう！今日もやろうか？」

ってか、学校はどうした？今日は平日だが。

「今日は華いんのか。」

「もう夏休みだよーん♪

まあ、修行漬けの休みになりそうだけどね。」

そういや、もう夏か。高校落ちてから三ヶ月だな。

そう言った華の表情には決意が見えた。

――――――――んじゃ、全力でやろうか。

そんな覚悟が感じれた。その気迫は気持ちよかった。

「おもしれぇじゃん。」

俺は笑った。それを見て、華は少し不思議そうな顔をした。

「何がおもしろいの？」

「俺は華を超えていく。そのためにはお前が俺の上にいてくれなきゃなんねぇ。」

それを聞いて、クルエルはくすっと笑った。

華は少しムッとしてたが、すぐに笑った。

「そう簡単に超させると思わないでよ？」

「簡単に超えれちゃつまんねぇ。」

俺も華もニヤッと笑った。

せっかくこの組織に入ったんだ。退屈させるなよ。

第１８話　進化へ（後書き）

クルエルでーす♪
次回、まだ任務は一回しかやってませんが、私から重大発表がありますよー。
皆さんには圧倒的な力を持っていた、あの“スパーダ”を超えていただきます。
なーに大丈夫ですよぉ♪
あなたたちの能力には、自分たちが思っているよりも伸びる余地があるんですよ・・・・。

次回『進化の覚悟』

第１９話　進化の覚悟（前書き）

前回、アドバイスがありましたので
行間を空けずに書いてみました。

こっからは上級試験篇です！！
よろしくです！！

第19話　進化の覚悟

ザン！
「ギャアアアア・・・・・・！！！！」
ドスン・・・・・・
「ふうっ。」
「はい、お疲れ～。」
「今日も疲れたわねー。」
ビーッビーッ
「おう、クルエルか？今ちょうど終わったとこだ。」
今日で例の任務から二週間が経った。
こなした任務は十を数える。大分悪魔共を滅(ころ)すのにも馴れた。
『随分と手馴れてきましたねぇ。任務にかかる時間が短くなってきてますよ。』
「まあねー！あたしたちも強くなったもんねー！」
そうだな。
俺たちはあれから修行と任務の繰り返しの日々を送ってきた。
そのおかげで運動とか、反射速度も上がったが、戦闘の勘が冴えるようになってきた。
よく銃弾が止まって見える、とか言うじゃん。
よくあの超人現象が起きるようにもなった。
『星南さんの調子はどうですか？』
「上々です。」
今までの任務の中でわかったことが一つ。
星南は実質三叉の槍(トライデント)最強だ。
例の任務で発覚した、“天空龍の星華”。
雷撃の華に時の星南。
華は凄まじい威力の雷撃を放つ姿が、まるで龍のよう。
星南は疾(はや)く、時を操るかのように戦場を駆け抜ける。

そんな二人のコンビのチーム名だったそうだ。
何があったかは知らないが、華は超術の力が衰えてる。
華の放つ電撃の大きさこそ変わらないが、燃料の密度が小さくなってる。
電撃の攻撃力が低下してる。一撃で悪魔を倒せないんだ。
華には言ってないが、それくらいは俺でも気付いたさ。
自分でも気付いてるはずだしな。
それに引き換え、星南はどんどんスピードが上がってる。
本当に時を“止めて”いるように・・・・な。
悪魔に向かって手をかざしたかと思うと、星南の姿は消えてなくなる。
その瞬間には悪魔が倒れているのだ。俺の“鴉の眼”でも追えない。
『そうですか。では帰還してください。できるだけ急いでくださいね。』
「了解っと。」
華が答え、通信はすぐに途切れた。
クルエルが急げ、なんて初めてだな・・・・。
何か用事でもあるのか？
「総統が急げ、だってさ。」
「そうね。じゃあ、桜木君に少し運んでもらいましょうか？」
あ？
「いいねー！ウサっち、変身変身ー！！」
「なんで俺が！？俺よりも星南の方が速いだろ！？」
「私じゃ二人を運ぶなんてできないわ。こういうのは男の仕事でしょ？」
星南は悪戯っぽく笑う。
・・・・・ちっ。
俺は思わず赤面した。
「どうしたのー？ウサっちもしかして・・・・・。」
「ばっ！！違ぇよ！」

華がはやし立てた。俺は少し焦る。
この二人はたしかにレベルが高ぇがな。意識はしてねぇよ。
「じゃあ冗談はそれくらいにして、行くぞ。フッ！」
バシュウ！！
「掴まれ。振り落とされないようにな。」
バサッ！
俺は二人を抱えて飛び立った。

「おっかえりなさーい♪随分と早いおかえりでしたねー。」
「いやー、ウサっちが飛んでくれましたから♪」
華がグッっと親指を立てた。
そんなに速かったか？疲れるからスピードは５０％くらいに抑えたんだがな。
さーて、ここで本題。
「で、急げって何か用事があるのか？」
「実はそーなんですよぉ。話があります。」
話は今までに散々してきた。今度はなんなんだよ？
「これはチーム全体に関わる事ですよ？あなたがた全員にです。」
おお？今までは俺に対する説明のみだったのにな。
華と星南にも関係することって・・・・？
「今月の２０日に昇格試験があります。
私はあなたがたを受けさせようかと思っているのですが、どうですか？」

昇進試験？
「中級試験ですか。」
「え！中級天使になれるの！？やったね！！」
「試験なんかで昇格すんのかよ。ま、折角のチャンスなんだからやらせてもらうか。」
随分と急に昇格するんだな。まだ任務経験１０回だぞ？
ま、例の任務以外、楽勝だったけどな。
「いやいや♪あなたがたに受けてもらうのはもっと上ですよ♪」
あ？上？
華も星南もポカンとしている。
「上・・・・級・・・・？」
「試験・・・・？」
「マジか。」
クルエルはニコッと笑った。
「あなたがたが受けるのはもう一個上の“上級試験”です♪」
待て待て。いくらなんでもそりゃ早すぎないか？
「待って！ちょっと待って！！」
「ちょ・・・・華！？」
どうした？慌て方が普通じゃない。
「総統！！待って！ちょっと待って！！」
「華さん、落ち着いてください。まだ時間はありますし。
あなたがたは潜在的にはもう上級天使を上回っています。」
「でも、早過ぎませんか？」
星南が困ったような声で言った。
「星南さん。現在この中で一番実力があるのはあなたなんですよ？
さて、どうします？何も今回だけがチャンスではないので、断ることもできますよ？」
・・・・・・・・・・・・。
「――――俺はやろうと思う。」
「――――チャンスはフル活用するべきね。」

「あたしは――――――――」
華は答えない。
それどころか震えだしている。
「ハア・・・・じゃあ今回の話はナシですね。」
いきなりクルエルの表情が変わった。
「え・・・・！おいクルエル！！」
「この試験はチーム単位でなければ受けることはできません。」
「そんな・・・待てよ！！」
俺は、冷たく突き放すクルエルに食い下がった。
しかし、クルエルはこう言い放った。
「あなた方はこの試験の意味を勘違いしていませんか？」
「意味・・・・？」
「この試験に合格すれば、あなた方の実力はたしかなモノと認められ、
任務も難易度の高いものを受けることになるでしょう。
しかし、任務には難易度が高ければ、大きな犠牲も伴う危険があるんです。
あなた方に、その命を背負う覚悟がありますか？
これは、超術という力を持った代償なんです。」
クルエルの言葉には重みがあった。
なんとも言いようのない重みが・・・・・。
俺は何も言えなかった。

第１９話　進化の覚悟（後書き）

おう、桜木だ。
なんだかエライことになってきたな。
クルエルはこえぇしよー。しかも華はすげぇ落ち込んでるし。
でも、この試験は受けてぇよ。俺は覚悟するぜ。
どんな責任でも背負ってやる。どんな命でも守ってやるさ。

次回、『進化への道』

第２０話　進化への道

『命を背負う覚悟がありますか？』
クルエルが部屋を去ってから、誰もしゃべらなくなってしまった。
あの言葉は俺たちに重くのしかかって、いろいろなことを考えさせられた。
命を背負う・・・・・
そんなことは考えたことなかった。
“守る”という概念そのものがなかった。
「――――――俺は強くなる。頂点（てっぺん）に立つまでな。」
俺はそう言って部屋を出た。
タッタッタッタッタ・・・・・・
そのまま早歩きで俺は訓練場に向かった。
ガチャ
バタン
「・・・・・変身（トランス）。」
バシュウ
俺はこの超術（ちから）で変わるはずだった。
なのに、これじゃ今までと変わらねぇじゃねぇかよ・・・・・。
俺は・・・・・何がしたかったんだ・・・・？

一方、残された華と星南。
「華・・・・・。」
「ゴメンね。なんて言ったらいいかわからないけど・・・・・・・。
あたし・・・・・。」
星南にはわかっていた。
兎と少しだけ、華の超術が弱まっていることについて話していたからだ。
今の華の超術には、燃料が極端に不足している。

必要燃料の半分以下にまで減ってしまっているのだ。
天使にとって、燃料が減ることは寿命を削ることと同じ。
このままでは力が消えるどころか、華の命が危なくなってくる。
「華。私、力になれないかな？
がんばろうよ。強くなろうよ。私たちは、チームでしょ？」
星南はそう声をかけた。
「うん。そうだよね。強くならないとダメだよね。
それしかあたしには道はないんだよね。」
「そうよ。頑張ろうよ。」
そう・・・私たちには逃げる道はない。
それが私たちの責任。
前に進むための道しかない。
――――――――――進化の道しか。

次の日。
ふあ～あ・・・・・・
昨日のことをずっと考えてたら、眠れなかった。
こういうときは体を動かすのが一番だ。
俺はまた訓練場に向っていた。
華と星南はどうしたんだろうな。
がちゃ
ゴオッ！！！！！
「うおっ！！！」
扉を開けた瞬間、いきなり俺は吹き飛ばされてしまった。
「な・・・・なんだ！？」
「あっ。ウサっち、おはよー！！」
「桜木君、おはよう！！」
見ると二人は修行中。組み手をやっていたようだ。
華の調子は依然悪いままみたいだが、今までとは違う、圧のある燃料を放っていた。

「おいおい、華。気合い入ってるみたいだな。」
「そうね。あたしたちには進化することしか、道は残されてないんだもん。
強くなるしかないんだよ。
今はちょーっと調子悪いけど、必ず力を蓄えて、進化するからね！！」
「私たち、考えたのよ。
今の私たちにできるコトは何かって。
結局辿り着いたのは桜木君と同じ、上を目指して強くなることだったわ。
当然、上級試験だって受ける覚悟もしたわ。」
そう言った二人には自信が溢れているように見えた。
・・・・・二人は強くなっている。
実力の話ではなく、精神が強くなっている、そう思った。
「俺も昨日一晩考えた。
“命の責任”は重い。かなり重いさ。
俺なんかじゃとても背負い切れる訳ねぇ。
でも、それって一人で背負うもんじゃなくてよ、チームで背負うモンだろう？
少なくとも一人よりは三人のがいいに決まってる。
だから、俺たちは三人で強くならなきゃならねぇ。
一人の力なんて意味がねぇ。大事なのはチームの力。
そうじゃねぇのか？なあ、クルエル。」
「おや？わかってましたか？」
「「！！」」
星南と華は気付いていなかったようだ。
「総統・・・・！」
「あ・・・・あの・・・・・！！」
「あなたがた。これだけの答えを一晩でよく出しました。
命というものは取り返しがつきません。

人を生き返すような超術があればいいのですが、
そんなものはやっぱりないんです。
そんな命は一人で背負い切れるわけがないんです。
大勢だったら責任が取れる、というわけではありませんが、
一人では救えない命も、三人いれば救うことができるんです。
救える命が何百から何万、何億まで増えるんです。
これが一番大切なことなんですよ。
取り返すことのできない命ならばなおさらでしょう？」
コクッ
コクッ
コクッ
俺たち三人は大きく頷いた。
それを見て、クルエルはニコッと笑った。
「――――受けますか？上級試験。」
俺たちは顔を見合わせた。
そして、声をそろえてこう答えた。
「「「はい！！！！！」」」
「よろしい♪
ではスパーダ、入ってきてください。」
がちゃ
「おう。」
「はい。」
「・・・・」
え？少し流れが掴めないんですが？
華と星南もポカンとした表情。
「さーて、これからあなたがたの師匠（せんせい）となる方々ですよ。
今日からは個別修行開始です♪」

第２０話　進化への道（後書き）

はぁい♪華でーっす♪
これからスパーダがあたしたちの師匠！？
・・・・あたしの調子が戻れば、あいつらなんてぼっこぼこなのにィッ！！
星南なんて、あいつらよりも強いんじゃないの？
ホントに強くなれるのかなぁ・・・・？

次回、『超える壁』
お楽しみにーー！！

第２１話　超える壁（前書き）

前回、あとがきで「次回、更なる力」とか書いてましたが、すいません。
次話書いてみたら、全然合いませんので、勝手に変更させていただきました。
前回読んでいただいた方々、申し訳ありません。

第２１話　超える壁

「これから一ヶ月間、スパーダの三人に師匠(せんせい)になって頂きます♪」
「「「えええええええええ」」」
俺たち三人は驚いてしまった。
日本で最強のチームに指導してもらう分には文句はないのだが・・・・。
「はい、じゃあ修行開始♪」
え？
ボカン！
俺だけが吹き飛ばされた。
スパーダの大男が手をかざしたときに、なにかが腹に当たって、そのなにかが爆発したんだ。
・・・・なんだ今の！？
初任務のときに見たアレか！？
三人のうちの大男がズンズンと俺に歩み寄って、こう言った。
「おう。俺が今日から貴様の師匠となる、獅子崎迅(ししざきじん)だ。」
迅は二カッと笑った。

星南。
「僕がこれから君を指導させていただきます、風月拓馬(ふうげつたくま)と言います。」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
この人ちっちゃい。
小学生？
「ちなみに歳は３２。身長は１４６．８でーす。」
さんっ・・・・・！？！？
おさ・・・いや・・・・若ッッッ！！！！
「あー！ちっさいからって馬鹿にしてますね？

でも――――――怪我することになるのはどっちでしょう？」
ぞくっ
拓馬からは異様な迫力を感じた。
いや、迫力というよりも・・・・・『威厳』
――――そうだった！この人は日本最強チーム、スパーダの一人なんだ。
全力でやらないと怪我じゃ済まない・・・・！
「スイマセン。でも馬鹿になんかしてませんよ。
では・・・・・・。」
集中・・・・集中・・・・集中・・・・。
星南は深呼吸をしながら構えた。
時よッ！！！

華。
「・・・・僕が・・・あなたを指導する・・・・垣村春慶（かきむらしゅんけい）で・・・・す。」
春慶はそれまで読んでいた本を閉じ、そう言った。
「はあ・・・・よろしくお願いします。」
なんかやりづらいなぁ・・・・・。
相手のテンションが低いとこっちの気分も下がっちゃうよ・・・・・。
「でー・・・・具体的には何を？」
華は単刀直入にそう聞いた。
「・・・何も・・・しない。」
へ？
「他のみんなは・・・戦って超術そのものの力を上げるけど・・・・・
あなたの場合・・・・超術が使えない・・・・。」
カッチーン・・・・。
今のちょっとカチンと来たよ？
「あたしだって使えるに決まってんでしょ！？
大体使えないんなら、こんなとこにいないわよ！！！」

「そういう意味じゃない・・・・。
じゃあ・・・僕に一度だけ撃ってみて。」
意味がわからない・・・。
まあ、とりあえず撃てってことね。
あたしはジャンプで距離をとった。
「じゃあ行くよー!!はっ!!!!」
ドウッ!
合わせた両手から、一直線に電撃が走る。
が。
――――――フッ
いきなり電撃が消えた。
「あっ!」
思わず声が出てしまった。
それに。
「ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・。」
息切れが激しい。こんなことはなかったのに。
「ぜぇっ・・・ぜぇっ・・・!」
だめだ・・・立ってらんない・・・!!
あたしはその場に座り込んだ。
すぐに春慶が歩いてきた。
「酷いね・・・。」
「な・・・なん・・・ぜぇ・・・なの・・・?」
あたしはどうなったんだ?
急に超術が弱くなったり、消えちゃったり。
「重度の燃料(フュエル)不足・・・。
試験まで、超術使っ・・・ちゃだめだよ。」
そ・・・そんな・・・。
「あなた・・・さっき、両手で撃った・・・。
でも・・・昔は・・・片手を銃を構えるみたいに・・・撃ってた。
なんで?」

「そ・・・それはっ・・・・・力が入るから・・・・・。」
「・・・片手じゃ力が・・・入らなくなったからじゃない？
わかったら・・・そのまま動かない・・・こと。
それが・・・・一番いい・・・の。」

3分後。兎。
ドサ
「かはっ・・・・・！」
「おいおい！！マジで試験受ける気なのか！？」
迅はつまらなさそうにそう言った。
――――歯がたたねぇ！
全身変身（フルトランス）しても全くだ！
これが上級天使かよ・・・・。
「おい、立てよ。立たないと修行になんねーだろうが。」
――――クソ。
バサッ
俺は翼を広げて飛んだ。
格闘能力に差がありすぎる。喧嘩仕込の殴り合いじゃ勝てねぇ。
だったら・・・・。
「滅却の矢（イレイザー）”！！」
ゴアッ！
赤い光線が走った。
「っ！！！」
ドガアアアアアア・・・・・・・
まともに食らった。ちっとは効くだろう。
「・・・・貴様、何モンだ？」
――――全然だめか。
「今のはなんだ？初めて見る超術だな。
少し貴様に興味が湧いたぜ。遊んでやるよ。」

迅は嬉しそうに笑った。
くそ！アレでも駄目となると打つ手がねぇ！！
せめて動きを止めれるくらいの攻撃が・・・・・・。
一撃じゃなくてもいいんだ！！
高速連続攻撃が必要だ・・・・・！

星南。
「そ・・・・そんな馬鹿なっっ！！！」
「何をそんなに驚いてるんですか。」
「あなたがっ！この世界で動ける筈がないっ！！
時を止めた世界で、動ける筈がない！！！！！」
そう。私たちが今いるのは、時を止めた世界（インターバル）。
私の超術で世界の時を止めたのに。
何で拓馬さんは動けるの。
「あなたの超術が時を止めるものだったなんて。おもしろいですねー。
その原理も実におもしろい。」
にやっ
拓馬は笑った。
私の超術は強化系だけじゃない。
あらゆる天使の中でも最も古い超術、“休憩時間（タイム・アウト）”。
この世界の空間の狭間、“ウラ”側には時間を管理する、巨大な時計がある。
そこに私の意識念導体を飛ばして、時計に燃料を使って衝撃を与える。
そうすると、世界の時間が止まる。
当然、衝撃が強いほど止まっている時間は長くなるし、
弱ければ短くなる。
さっきは最大の燃料で衝撃を加えたはず。
なのに。なんで動けるの！？

「簡単なことさ。僕の無意識に流してる燃料(フュエル)が
君の発してるそれよりも大きいってだけ。お分かり？」
そんな滅茶苦茶なっ！！！！
無意識に流す燃料なんて全体の０．１％にも満たないのに！
「アッハッハッハッハッ！」
ビクッ
いきなり拓馬が笑い出した。
「ゴメンゴメン。ショック受けた顔してたから。
実際燃料の量にはそれ程の差はないんだよ。君は燃料の超術変換が
下手なんだ。
それさえ上達すれば、君はあっという間に強くなる。」
「え。本当？」
「冗談を言ってどうするの。
今回の僕のお仕事は、君を上級天使レベルにまで育てること。
ちょっと厳しいかもしれないけど、がんばろうね♪」
「は・・・・はいっ！！！」

華。
「皆さん、それぞれに目標ができたようですねぇ。」
クルエルは横で見ていて楽しそうだ。
「心配なのは華さんですが、大丈夫ですかねぇ？」
「大丈夫。心配は・・・・いらない。」
「そうですか♪それはよかった。」
いつの間にか春慶が横にいる。
クルエルは遠くで座ったまま動かない華をチラッと見た。
すごく退屈そうですが、まあこれも修行ですね。
「こんなんで大丈夫なのかなー？」
・・・・なんか言ってますけども。
「動かない時が・・・一番燃料(フュエル)を回復する・・・・。」
「ぅわあ！！びっくりするなー、もう！！」

いつの間にか春慶は横にいない。
フフフ・・・・おもしろくなってきましたね。
ここまで興奮するのは、彼らをスカウトした時以来ですね。
獅子崎迅、風月拓馬、垣村春慶。
日本最初で最強のメンバーを揃えた時以来です。

第２１話　超える壁（後書き）

おう！迅だ！！
こいつら糞弱ぇなぁ！！受かるわけねーじゃん！！
だが、あきらめねぇ根性は認めてやらぁ。
それにあのガキ・・・・。本当に天使か？
ってか、あいつら学生だろ？宿題とかあんのに大丈夫かよ！！
・・・・・ん？宿題？
おい！！宿題やってんだろうなぁ！？

次回、『眠れない日々』！
読めよ！！

第２２話　眠れない日々

「おおおおおおお・・・・・・！！！！！」
「まだまだだなぁ！！おい！！！」
ドゴーン・・・・
ガシャーン・・・・
修行開始から２週間。
試験まではもう１週間までに迫っていた。
当然ながら俺は迅に敵うわけもなく、２週間ずっとボコボコにされていた。

ビ――――――――ッ

本日の修行終了を告げるベルが鳴る。
「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・・・！」
今日も見事にボコボコ也。
「お前・・・・・。」
迅が寄ってきた。
顔色は全く変わってない。息も上がってない。
・・・・・差を思い知らされるな・・・・。
「俺のモノマネがうまくなってきたじゃねぇか。」
３日前のことだ。
迅との接近戦で、思いっきりの右ストレートを空振りしたら
拳からなんか出たんだよ。
それが勢いが強いのなんの。凄まじいスピードで物体が飛び出したんだ。
まあ燃料の塊だったんだが、これは使えるかな、と修行に使ってるワケよ。
「ああ、迅の“爆風（ブラスト）”には敵わないさ。」

「いいや、あれは俺のよりもスピードがあるからな。
実戦でも使えるぞ。しっかりやっとけ。」
・・・・迅が俺を褒めたのは初めてだな。
迅の超術は“爆風”。
自分の燃料を空気に練りこんで、それをぶつける技なんだとか。
燃料ってのは個人個人で性質が違う。
華の燃料は“発電”と“放電”。
星南の燃料は“静止”。って感じでな。
性質が違うと、同じ超術でも効果が違ってくるらしい。
迅の燃料の性質は“暴発”。ある程度の刺激を与えると爆発する。
“爆風”はその性質を上手く活かして自分で開発した超術なんだってよ。
「じゃあ、俺はクルエルさんに報告の義務があるからな。」
ずん、ずん、ずん、ずん・・・・
行っちまった。
「だはー!!疲れたー・・・!」
「おう、華。」
入れ替わりで華が入ってきた。
今の華の修行は“燃料の回復”。動かないのがいいんだとよ。
「修業はどーよ?回復はまだなのか?」
「そーれがサッパリ。全然効果ないんだよー。」
泣きついてきた。
「おいおい。あと1週間だぜ?間に合わせろよ?」
「・・・頑張る。」
よしよし。いい子だ。
上級試験は必ずチームで受けることになってる。
誰か一人でも欠けたら参加すらできないからな。
「でもよ、上級受かったらチーム解散っておかしくねーか?」
そう。上級試験に受かったらチームは強制的に解散することになってる。

チームで受けるのに。
「そりゃ仕方ないさ。」
「仕方ないのよ。上級天使は本来、下級天使のチームをまとめる隊長なんだから。」
「お、星南。」
星南も修行を終えたようだ。
話によると俺と同じくらい目茶苦茶な特訓してるらしいが。
「スパーダなんて特別なのよ。
あの三人のチームでしかできない任務ってのもあるんだから。」
ああ、そうか。
超Sランク任務ってのもあるんだな。
「星南ぁぁ〜！なんか久しぶりぃ！！！」
「そうね、華。久し振り。」
俺らはあれから別の部屋で修業をやるようになってたんだ。
今まであの二人は離れたことがなかったみたいだな。
華は泣いて抱きついてる・・・・。
ほんとうに仲いい二人だよ。

カツ・・・カツ・・・カツ・・・
クルエルは廊下を歩いていた。
横には迅がいる。他は誰もいない。
「どうしたんですか、私は忙しいんですよ。
どうでもいい用なら今度にしてくれませんか？
今日中にこの書類を・・・・」
「待ってくれよ。これは言っとかなきゃいけねぇ。」
迅は深刻そうな顔でクルエルを睨む。
これは本当に何かあったのか。
迅のこんな顔は早々お目にかかれない。
「なあ、あのガキのことなんだけどよ。あいつって何者だよ？」

・・・・・！
「・・・・どういう意味ですか。」
「そのまんまだよ。まさか“天使”じゃないよな。」
・・・・迅は勘が鋭い。
第六感は完全に人間を超越している。
「では・・・・なんだと思いますか？」
「俺が思うに・・・・“悪魔”・・・・。」
・・・・・フフ。悪魔とはまた大きく出たものですねぇ。
「フ・・・“悪魔”ですか。」
「あいつの使ってるのは超術なんかじゃねぇ。
あれは魔閃（バルス）と魔弾（ボロス）。魔術だろう？」
「・・・超術と対を為す力、魔術。
あれは・・・・魔術なんかじゃありませんよ。」
ニコっ
・・・・・・・。
「・・・・本当か？それは信じてもいいのか？
悪魔は滅さなきゃならねぇ。それはわかってるだろ？」
「それはわかってますよ。」
「・・・・今日の修行は終了した。」
「順調に進んでいますか？」
「悪魔化の兆候はない。三人とも順調だ。」
「それはなにより。」
カツ・・・カツ・・・カツ・・・
足音だけが虚しく響いていた。

いまだ華は星南に泣きついている。
仲がいいのはいいんだが・・・。

「ったく、華も星南もいいかげんｎ・・・」

――――――――ドクン――――――

？

心臓が脈打つ。

なんだ、この感覚・・・・？

バゴン！！！！！

爆音とともに、地面が吹き飛んだ。

「な・・・なんだ！？」

「きゃあ！！」

「な・・・・なによっ！？」

「ゴオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！」

爆音に負けないくらいの勢いの叫び声が聞こえた。

「悪魔（デビル）だっ！！！」

ここのセキュリティはどーなってんだっ。

バゴン！！！！！！

爆音がもう一発。

「なっ・・・・・！！！！もう一匹！？」

華と星南が驚きの声を上げる。

と思ったら

バゴン！！！！！！

・・・・三匹！？
「どーなってんだ！？
ここって対悪魔組織なんだろ！？警備ってこんなに薄いものか！？」
「そんな筈は・・・・！！超術で結界を張ってるはずよ！！」
「でも実際侵入してきてるんだからぁ！！」
くそ！
よりにもよって修業後に入ってきやがって！！
もう燃料が残ってねぇよ！
だが、今やらなきゃ殺されちまう。
華は戦闘不可能だってのに・・・・・。
「・・・・ちっ。星南、戦(や)れるか？」
「私のほうはもう底ついちゃった・・・・。兎君は？」
星南も戦闘不能か。これはまずい。
「・・・正直キツいな。でもっ！やるしかないだろ！！変身(トラ)・・・・！」

ガクン

あ・・・・あれ？燃料を使おうとしたら、力が抜けて・・・・。

――――――ドクン

「・・・・ぐっ。」
心臓がまた強く脈打った。
またか。何なんだよ。

――――ドクン――――ドクン――――

だんだん鼓動は早くなる。
それと同時に燃料の制御は利かなくなっていた。

――ドクン――――ドクン――――ドクン――――

ボシュッ！ボシュッ・・・ボシュウ！

「きゃ・・・・！」

「ちょ・・・っと！」

華と星南は状況を飲み込めないであたふたしている。

「な・・・・なんでもっ・・・なっい・・・。」

こんなことしてられねぇ。目の前に三匹も悪魔がいるんだ。

――ドクン――ドクン――ドクン――ドクン――

拍動の加速は止まらない。

残りが少ない燃料も流出してしまう。

くそっ。こんなんじゃ戦えねぇっ！

どうする！？どうする――――――！？

ブシュッ

辺り一面が真紅に染まった。

「危ない所だったねぇ♪」

「・・・・・・拓馬さん！！！！！」

星南が歓喜の声を上げた。

た・・・・助かった！

「ちょっと惨いことするから目、つぶってるといいよ♪」

む・・・惨いこと！？
ホントに見ちゃダメな気がする・・・・・。
「おい貴様ら。あんまり調子こいてんじゃねぇぞ。」

ゴォッ！！！

うっ・・・・殺気・・・・・・。
「細切れにしてやる♪」
俺が次に目を開けた時にはバラバラの悪魔が転がっていた・・・・。
「大丈夫だった？」
拓馬さんの超術“斬風（ソニック）”。
性質“切断”が生み出す全てを切り裂（スラッシュ・バスター）く刃は、
スパーダ内で最高の攻撃力を誇る。
戦場に解き放たれた風の刃は誰にも止めることができない、と聞いた。
「はい、私は全然平気です。」
「俺のほうももう大丈夫です。スイマセンッした。」
いつの間にか俺の心臓の拍動は落ち着きを取り戻し、燃料の流出も止まっていた。
一体あれはなんだったのだろう。
「それにしても、悪魔が一度に三匹も・・・・・。僕のほうに何の連絡も・・・・。」
前にも悪魔が侵入したことがあった。
――――――何かが変だ。

その日の夜
俺は自分の部屋で寝つけないでいた。
体はダルイ。精神的にも疲れ果ててていたにも関わらず、だ。
悪魔が侵入してきたときの感覚はまだ残っている。

あの体の内側からゾワっとするような・・・・・・・ん？んんんん？
窓に映った自分の顔に妙な違和感を感じた。
（右眼が赤ぇ・・・・）
右眼の黒い部分が赤く染まっている。
（あのときか・・・・・・）
原因はそれしか考えられない。
・・・・・・俺にも異変が起き始めてるのか。
って超術が使えるようになってから2か月なんだけど。
気づくと時刻はもうすでに2時を過ぎていた。
「ふうっ。・・・・俺、寝てもいいかな？」
「ダメぇぇぇぇぇ！！！！絶対ダメぇ！！」
「ダメよ！二人でいるとこの子寝ちゃうし、私も眠くなっちゃうんだもん。
それにしても、兎君って頭いいのね。」
俺は今、俺の部屋で星南と華の夏休み課題を手伝い中。
こいつら夏休みの宿題をすっかり忘れてやがったんだ。
「これくらい中学でやってんだから当然だろ。
ってなんで俺が付き合わなきゃならないんだよ・・・全く。」
「星南ぁー。ここわかんないー。」
「ええっと・・・ここは・・・」
「この直線と点の距離をもとめりゃいいだろ。
こっちの式代入すりゃ楽勝じゃねぇか。」

・・・・・・。

少しの間があった。
「なんだよ。早く解けよ。」
こっちは眠い目こすってやってんだ。
はやく終わらせてくれないか？
「・・・・ウサっち。これって高校でしか習わないよ？」

「あ？何言ってんだ。中４でやっただろうが。」
・・・・・・。
俺なんか変なこと言った？
「・・・・兎君。中学は何年間通ってた？」
「４年間。」
ズザザザザザザザザザッ！
二人がものすごい勢いで後ずさり。
人間ってこんなに早く後ろに動けるんだな。
「・・・・ウサっち。出身中学ってどこ？」
「もしかして、とってもおっきい学校？」
？
突然変なこと聞くな。
「俺は国立帝王都学園の中学部出身だが？」
「「えええええ～～～～～～～！！！！！！マジで！？」」
「なんだよ、文句あっか？」
まあ、帝学っていったら国Ｎｏ．１の中学校だからな。
卒業生の８割が東京大学に登り詰めていく中高一貫教育の学校。
別に俺はなんとも思ってないわけだが。
「いやいや！文句とかじゃなくて！ちょっと・・・意外だった・・・。」
「ウサっち、すごいじゃん！天才中の天才が集まる学校だよ、それ！・・・あれ？高校は落ちちゃったの？」
「ああ、ウチの学校の方針でな。
最後の学期末テストで２０位以内に入ったやつは帝国大附受験させられるんだよ。」
国立帝国大学附属高等学校。
最近できた、東京大学を上回る頭脳の持ち主たちが入学する大学。
まさに「帝国」だよ。そんなとこに入っても幸せとは思えん。

まっさか俺が受験することになるとはな・・・はは。
「あちゃー。それはしょうがないわー。
でもさ、他の学校は受けなかったの？」
「親がいねーんだ。受験代が勿体ねぇわ。
もともと学問なんかに興味はねーが、ただ学校が受験代も出すって言うからそこだけ受けたんだよ。」
「「へーえ。」」
テキトーな返事だな、おい。
華は目を輝かせている。・・・何を考えているかはなんとなくわかる。
星南は放心状態。そんなに意外かよ。早く宿題やれっての。
「ああもう！！俺はねみーんだよ！！はやくやれ！！」
「ウサっちー教えてー♪」
「うるさい！自分でやらんか！！」
こうして夜は更けていく・・・・・・。

ジ――――ジジ・・ジ――――――
とある国のとある場所。
男が一人、馬鹿でかい椅子に座っていた。
『ククク・・・・。無事第二段階に進んだようだな。』
目の前にはモニター。
その画面には兎たちの様子が映っている。
音声は飛び飛びで、うまく聞き取れない。
『もう少し・・・・もう少しだ・・・。

もう少し頑張って成長しろよ・・・。俺の期待に応えてくれ・・・。
美しく成長するんだ・・・・。この私の為に最高個体になってくれ・・・。

私の

息子よ。』

裏切りの卵(ユダ)は、動き始めた。

第２２話　眠れない日々（後書き）

どうもこんにちわ！星南です。
兎君があんなに頭よかったなんて・・・・。
あとで聞いたけど、ＩＱは２００近いって言うじゃない！！
大学は落ちるつもりで受けたとか言ってたけど勿体ないわ！！まったくもう・・・・。

そんなことよりも！もう試験が目の前なの！！
修業はなんだかんだいっても効果はあがってるみたい。
あとはぶっつけ本番なんだけど・・・・・。
・・・・・・・・ふ・・・・あ・・・・ん・・・・！！！

次回、『上級天使昇格判定試験』！
できたら読んでくれたら嬉しいわ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4234f/

赤兎

2010年10月18日09時42分発行